

伊坂遺跡発掘調査報告

い さか
伊坂遺跡発掘調査報告

二〇〇四(平成16)年三月

三重県埋蔵文化財センター

2004 (平成16) 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター



遺跡遠影（南上空から）



北地区全景（東から）

序

銅鐸、それは謎の祭器とよく言われています。約2,000年前の当時は、おそらく祭祀に関わって使用されていたことは間違いのないと思われませんが、集落遺跡から出土することよりも、山中などから偶然に発見されることが多いことや、徐々に大型化して最大のものは130cmを超えるものもあること、さらに弥生時代の終わりとともに全く姿を見せなくなるなどから、そう呼ばれています。

本書は、今を遡ること約140年前の文久2年(1862年)、地元の農夫により発見された、その謎の祭器である銅鐸(通称、伊坂銅鐸)が出土したとされている伊坂遺跡の調査成果を収録してあります。三重県内では、これまでにその可能性も含めると17ヶ所、21個の銅鐸が見つかっています。これらの出土した場所が、何らかの交通の要所に多いということも指摘されていますが、この伊坂遺跡の場所に、東名阪自動車道に接続する形で第二名神高速道が建設されたことも、時代を超えて不思議さをも感じます。

今回の調査では、この銅鐸に直接関係するような遺構・遺物については不明で、やはり謎を深めたことになりましたが、次の時代である古墳時代前期の集落跡と、白鳳から天平時代にかけての瓦窯の灰原と思われる遺構等、新たな発見がありました。

私どもといたしましては、この成果報告書が文化財保護の一助としてご活用頂ければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたりましては、日本道路公団中部支社、同四日市工事事務所、三重県県土整備部高速道推進室、同四日市駐在、三重県企業庁、関係市町村教育委員会、関係機関および地元自治会をはじめとする多くの方々に温かいご理解とご協力を頂きました。末筆になりましたが、厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、平成9年度より三重県が日本道路公団中部支社（平成13年2月、日本道路公団名古屋建設局より改称）から委託を受けた、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査のうち、平成11年度から平成13年度に現地調査を実施した伊坂遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査にかかる費用は、日本道路公団中部支社の負担による。
- 3 現地での発掘調査の体制は、下記の通りである。

[平成11年度]

- ・調査主体 三重県教育委員会
- ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第二課
- ・現場担当 主 事 片岡 博
主 事 木野本和之
主 事 服部 芳人
技 師 原田恵理子
技術補助員 田中 美穂
- ・調査協力 四日市市教育委員会
- ・調査作業受託 アジア航測（株）・発掘建設リンク

[平成12年度]

- ・調査主体 三重県教育委員会
- ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第二課
- ・現場担当 主 事 木野本和之
主 事 服部 芳人
主 事 赤松 一秀（四日市市教育委員会から派遣）
- ・調査協力 四日市市教育委員会
- ・調査作業受託 株式会社 四門・株式会社 シン技術コンサル

[平成13年度]

- ・調査主体 三重県教育委員会
- ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第二課
- ・現場担当 主 事 松田 珠美
技 師 角正 芳浩
- ・調査協力 四日市市教育委員会
- ・作業受託 株式会社鴻池組 三重営業所

- 4 報告書の作成は平成14・15年度に行い、業務補助職員の有満俊江・新貝里美・福森雅子・山中陽子・檜野幸子・木村真弓・松崎由里・和田佐映子の補助を得た。また、遺構・遺物のトレースは、業務補助職員の石橋秀美・楠純子が行った。

- 5 調査期間中には下記の方々・機関にご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表します（順不同・敬称略）。浅川充弘（朝日町教育委員会）・齋藤 理（桑名市教育委員会）・清水政宏（四日市市教育委員会）・鈴木一有（浜松市博物館）・田村隆太郎（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）・椿坂恭代（札幌国際大学博物館）・難波洋三（京都国立博物館）・平野亜紀（桑名市教育委員会）・宮塚義人（宮塚文化財研究所）・森 逸郎・日本道路公団中部支社・同四日市工事事務所・三重県県土整備部高速道推進室・同四日市駐在・三重県北勢県民局四日市建設部・三重県企業庁・同北勢水道事務所・四日市市教育委員会・朝日町教育委員会・川越町教育委員会・四日市市八郷地区市民センター・八郷地区連合自治会・広永町自治会・北永台自治会・山村町自治会・千代田町自治会・伊坂町自治会・伊坂台自治会・埋縄地区自治会・地元地権者各位
- 6 本書の執筆分担は、目次と文末に示したとおりである。本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物図版の作成は、調査・報告担当者が行い、全体の編集は服部が行った。なお、竪穴住居SH302出土の炭化種子について、アジア航測(株)を通じて、札幌国際大学の椿坂恭代氏・宮塚義人氏による分析結果を収録させていただいた。
- 7 本書で報告した遺跡の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 本書に用いた地図および遺構実測図は、国土調査法の第VI系座標を基準とし、方位の表示は座標北を示す。なお、当地域の磁北は6度50分西偏する（平成元年現在）。
- 9 本書で使用した土層および遺物については、小山・竹原編『新版標準色帖』（9版1989）を使用した。
- 10 2つの遺跡については、既刊『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター2000・3）と『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター2001・3）と『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』（三重県埋蔵文化財センター2002・3）にその概要を公表しているが、本書をもって正式報告とする。
- 11 本書に用いた遺構表示略記号は、次のとおりである。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SH：竪穴住居 SK：陥し穴・土坑・土坑墓 SX：古墳の周溝

本文目次

I 前言	(5) 北地区 …………… (/) ……9
1. 事業の概要と調査に至る経緯 …… (服部) ……1	(6) B地区 …………… (松田)……12
2. 調査の体制 …………… (/) ……1	(7) D地区 …………… (松田)……12
3. 調査の経過 …………… (/) ……1	3. 遺構と遺物
(1) 発掘調査の経過 …………… (/) ……1	(1) 縄文時代 …………… (服部)……12
(2) 調査の方法 …………… (/) ……1	(2) 弥生時代 ……………(片岡・服部)……12
II 位置と環境	(3) 古墳時代 ……………(服部・原田)……14
1. 地理的環境 …………… (/) ……7	(4) 白鳳～天平時代 …………… (服部)……23
2. 歴史的環境 …………… (/) ……7	(5) 時期不明 …………… (/) ……23
III 調査の成果	IV 結語
1. はじめに …………… (/) ……9	1. 伊坂銅鐸について …………… (/) ……26
2. 調査概要	2. 古墳時代の集落について …………… (/) ……27
(1) 東地区 …………… (片岡) ……9	3. 瓦窯の灰原について …………… (/) ……27
(2) 東地区① …………… (服部) ……9	V 三重県伊坂遺跡から出土した炭化種子
(3) 西地区 …………… (原田) ……9	について ……………(椿坂恭代・宮塚義人)……31
(4) 西地区① …………… (服部) ……9	

写真目次

巻頭カラー1 遺跡遠景(南上空から)	写真15 西地区上部平坦面(南西から) ……42
巻頭カラー2 北地区全景(東から)	写真16 S X 201(北東から) ……43
写真図版	写真17 S X 201遺物出土状況(北東から) ……43
写真1 S H 302出土炭化種子 ……32	写真18 S K 202(南西から) ……43
写真2 S H 302全景(南から) ……35	写真19 S K 203(南西から) ……43
写真3 極東米軍機による遺跡周辺の垂直写真 (1947年撮影) ……36	写真20 S K 204(南から) ……43
写真4 東地区調査前(北東から) ……37	写真21 調査区全景(西上空から) ……44
写真5 東地区調査後(北東から) ……37	写真22 北地区全景(垂直・上が北) ……44
写真6 S K 1 全景(東から) ……38	写真23 S H 101・102・103・104全景 (垂直・上が北) ……45
写真7 S K 1 拡張後全景(南から) ……38	写真24 S H 101・102・103・104全景 (西から) ……45
写真8 東地区①調査前(南西から) ……39	写真25 S H 101検出状況(南西から) ……46
写真9 東地区①調査後(南から) ……39	写真26 S H 101全景(北から) ……46
写真10 S K 403(南から) ……40	写真27 S H 102西周溝内遺物出土状況 (東から) ……46
写真11 S K 403(西から) ……40	写真28 S H 102貯蔵穴遺物出土状況 (南西から) ……46
写真12 西地区調査前(西から) ……41	
写真13 西地区調査後(西から) ……41	
写真14 西地区上部平坦面(北東から) ……42	

写真 29	S H102全景 (南西から) ……	46
写真 30	S H103遺物出土状況 (東から) ……	47
写真 31	S H103床面検出状況 (東から) ……	47
写真 32	S H103IV区遺物出土状況 (東から) ……	48
写真 33	S H103南東部分柱穴 (北から) ……	48
写真 34	S H103排水溝土層北面 (南から) ……	48
写真 35	S H103排水溝 (南から) ……	48
写真 36	S H103全景 (南西から) ……	48
写真 37	S H104全景 (北東から) ……	49
写真 38	北地区①全景 (西から) ……	49
写真 39	北地区②調査前 (南から) ……	50
写真 40	北地区②調査後 (北西から) ……	50
写真 41	北地区③調査前 (東から) ……	51
写真 42	北地区③調査後 (東から) ……	51
写真 43	S K109 (北から) ……	52
写真 44	S K110 (東から) ……	52
写真 45	S K110完掘半裁 (南から) ……	52
写真 46	S K111完掘半裁 (南から) ……	52
写真 47	S K109・110・111全景 (東から) ……	52
写真 48	西地区①調査前 (西から) ……	53

写真 49	西地区①調査前 (北から) ……	53
写真 50	西地区①東斜面調査前 (東から) ……	54
写真 51	西地区①東斜面調査後 (東から) ……	54
写真 52	S H302床面検出状況 (北西から) ……	55
写真 53	S H302全景 (北西から) ……	55
写真 54	S H302遺物出土状況 (東から) ……	56
写真 55	S H302炉周辺 (西から) ……	56
写真 56	S H302Ⅲ区炭化材出土状況 (北から) ……	56
写真 57	S H302排水溝検出状況 (南から) ……	56
写真 58	S H302 (南から) ……	56
写真 59	S K301 (東から) ……	57
写真 60	S K312刀子出土状況 (南から) ……	57
写真 61	S K312刀子出土状況 (西から) ……	57
写真 62	S K312刀子出土状況 (東から) ……	58
写真 63	S B307 (北から) ……	58
写真 64	出土遺物 (1) ……	59
写真 65	出土遺物 (2) ……	60
写真 66	出土遺物 (3) ……	61

挿 図 目 次

Ⅱ 位置と環境

第1図	遺跡位置図 (1:50,000) ……	4
-----	---------------------	---

Ⅲ 調査の成果

第2図	調査区位置図 (1:2,000) ……	6
第3図	調査区地区割り図 (1:2,000) ……	6
第4図	東地区・東地区①・西地区・西地区① 遺構平面図 (1:800) ……	10
第5図	北地区・B地区遺構平面図 (1:800) ……	11
第6図	S K109・110・111・320実測図 (1:40) ……	13
第7図	S K1実測図 (1:40) ……	14
第8図	S K202・203・204実測図(1:40) ……	14
第9図	S H101実測図 (1:100) ……	14
第10図	S H102実測図 (1:100) ……	15
第11図	S H102東周溝内遺物出土状況図 (1:40) ……	15

第12図	S H102西周溝内遺物出土状況図 (1:40) ……	15
第13図	S H102貯蔵穴実測図 (1:40) ……	15
第14図	S H102炉実測図 (1:40) ……	15
第15図	S H103実測図 (1:100) ……	16
第16図	S H103排水溝断面図 (1:40) ……	16
第17図	S H103出入口施設土坑断面図 (1:40) ……	16
第18図	S H103南東部分柱穴断面図 (1:40) ……	16
第19図	S H104実測図 (1:100) ……	17
第20図	S K105・106・107・108実測図 (1:100) ……	17
第21図	S H302実測図 (1:100) ……	18
第22図	S H302遺物出土状況図 (1:20) ……………	18
第23図	S X201実測図 (1:40) ……	19

第24図	S X 201遺物出土状況図 (1:20) ……………	19	第33図	S H 302・S X 201・S K 301・312・ S K 403出土遺物実測図 (1:2・1:4・1:6) ……………	25
第25図	S K 301・306実測図 (1:40) ……………	19	第34図	包含層・検出時・表採遺物実測図 (1:6・1:1・1:4) ……………	26
第26図	S K 312実測図 (1:40) ……………	19	IV 結語		
第27図	S K 305・309・310・311・313・ 314・315・316実測図 (1:20) ……………	20	第35図	遺構配置図 (1:1,000) ……………	29
第28図	S K 317・318・321実測図 (1:20) ……………	21	V 三重県伊坂遺跡から出土した炭化種子 について		
第29図	S B 307実測図 (1:100) ……………	22	第36図	土壌サンプル採取地点 ……………	31
第30図	S B 308実測図 (1:100) ……………	22			
第31図	S K 403実測図 (1:80) ……………	23			
第32図	S H 101・102・103・104出土遺物 実測図 (1:4・1:6) ……………	24			

目 次

第1表	第二名神（愛知県境～四日市JCT） 埋蔵文化財発掘調査経過表 ……………	5	第5表	掘立柱建物規模一覧表 ……………	30
第2表	三重県内出土銅鐸一覧表 ……………	29	第6表	伊坂遺跡炭化種子出土表 ……………	32
第3表	竪穴住居規模一覧表 ……………	30	第7表	遺物観察表（1） ……………	33
第4表	土坑規模一覧表 ……………	30	第8表	遺物観察表（2） ……………	34

I 前 言

1. 事業の概要と調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）は、第二東名高速道路とともに既存の東名・名神高速道路と一体となり、四全総で提唱されている交流ネットワーク構想を推進するための高規格道路網の根幹となるものである。

三重県内では、愛知県境から東名阪自動車道と交差する四日市JCTまでと、亀山東JCTから滋賀県境間の2区間が事業化された。特に、愛知県境から四日市市伊坂町の四日市JCTまでの約14kmについては、平成14年度供用開始(平成15年3月21日に開通)を目途に急速な建設工事が急ピッチで行われてきた。

事業地内には、13ヶ所16遺跡の所在が確認されており、平成9年度から発掘調査を実施してきているところである。各遺跡の発掘調査経過については、第1表に記載してある。

2. 調査の体制

全体の調査の体制については、既刊『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』に詳しく述べられているため割愛する。なお、当遺跡の調査に関しては例言にも記してあるが、三重県教育委員会が調査主体となり、三重県埋蔵文化財センターが担当した。現地調査は平成11～13年度に、整理・報告書作成業務は平成15年度に実施した。

3. 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

調査は、銅鐸出土地ということで、丘陵平坦面に限らず斜面部分も対象とした。平成11年度から13年度の3年間で合計12,624㎡の面積を調査した。平成11年度は、東名阪自動車道の東側の丘陵斜面(東地区)で1,560㎡、西側の丘陵斜面(西地区)で2,900㎡、丘陵頂部の平坦面と北側斜面と西へ延びる尾根上(北地区)で3,860㎡の計8,320㎡を調査対象とした。平成12年度は、東名阪自動車道の西側の丘陵平坦面と

斜面部分(西地区①)で、2,970㎡、東側の丘陵斜面(東地区①)で280㎡の計3,250㎡を調査対象とした。また、平成13年度は、本調査として、南側から大きく入り込んだ谷の最も奥まった部分で774㎡(B地区)、平坦面の東側、東名阪自動車道の監視カメラ設置場所で20㎡(D地区)、範囲確認調査として北地区の尾根続きの西側で1,600㎡を対象面積(A地区)として3本のトレンチを設定して260㎡を調査した(第3図)。

(2) 調査の方法

調査区は、国土座標の第VI座標系に合わせて座標値の $X = -106,700.000$ 、 $Y = 57,400.000$ を起点に100mを1単位とする大地区を設けた。その際の地区名をAとし、東へ300mをB・C、南へD・E・Fとした。またその南にG・H・Iとし、ほぼ重地山を包括する大地区を設定した。この大地区設定を行ったのは、将来的に第二名神高速道路が西へ進む際に、伊坂遺跡の残り部分にも調査が及ぶ可能性があるためである。さらに4m×4mを1単位として25分割するグリッドを小地区として設定した。各グリッドは北西隅を原点とし、調査区の西から東へはA～Yのアルファベットで、北～南へは1～25の算用数字で表示した(第4図)。

遺構番号は、調査区が分かれ、また同時並行で別々の民間発掘調査機関に委託したため、東地区は1番から、北地区は100番台、西地区は200番台、西地区①は300番台、東地区①は400番台から付けた。

調査日誌(抄)

平成11年度(東地区)

- 7月5日 調査前写真撮影・掘削開始
- 7月9日 調査前測量
- 7月14日 土層観察用のトレンチ3本を設定して、掘削開始
- 7月22日 中央のトレンチを中心に掘削範囲を拡大しながら作業続行
- 7月23日 F-G13地区から弥生土器片出土
- 7月27日 調査区南側の約半分掘削終了

8月4日	中央のトレンチを中心に掘削範囲を北側に広げながら作業続行・若干土器が集中する部分あり	9月28日	全景写真撮影
8月5日	土器集中部分をSK1とする	10月5日	調査区西壁土層断面図終了
8月6日	写真撮影	10月8日	ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影
8月7日	調査区南側の裾部分で重機による掘削を開始	10月13日	現地調査終了・引渡し
8月19日	SK1写真撮影	平成12年	
8月25日	SK1測量・地形測量・セクション断面図測量	2月7日	立会い調査、重機による表土掘削、人力による遺構検出・掘削、調査範囲測量
8月31日	SK1周辺を拡張・掘削	2月8日	立会い調査測量・終了
9月16日	現地作業終了・引渡し	平成11年度(北地区①)	
平成11年度(西地区)		7月21日	重機による表土掘削
7月5日	調査前測量	7月27日	人力遺構検出開始
7月7日	調査前写真撮影	8月4日	SH101検出(焼土・炭化物含む)
7月16日	重機掘削開始	8月5日	SH102検出
7月21日	作業員開始・頂部平坦面掘削開始	8月17日	SH101掘削開始
7月22日	斜面を重機による表土掘削	8月19日	SH101焼土・炭化物の写真撮影・状況図作成
7月26日	平坦面遺構検出	8月24日	SH101土層断面図作成・SH102遺構掘削
8月5日	SX201須恵器杯身出土・写真撮影	8月25日	SH102より鉄製品鎌出土
8月9日	平坦面遺構検出・遺構掘削・斜面下部の土層判断難しく、トレンチ設定	8月26日	SH103・SH104検出
8月10日	SX201土層セクション実測	8月27日	SH102貯蔵穴検出
8月12日	斜面部分西壁・東壁に土層観察用のトレンチ設定・掘削	8月30日	SH103ベルトを設定して掘削開始
8月18日	SX201完掘・写真撮影	8月31日	SH104炭化物出土状況図作成
8月19日	SX201実測	9月2日	SH103埋土より土師器多数出土
8月23日	斜面部分等高線に沿ったかたちでトレンチ設定・土層観察	9月6日	SK105検出
8月24日	上部平坦面全景写真撮影	9月7日	SH103土層断面図作成
8月26日	上部平坦面1/20遺構実測	9月8日	SH102貯蔵穴遺物出土状況図作成
8月30日	平坦面下層確認のサブトレンチ設定・掘削	9月9日	SH103遺物出土状況写真撮影
9月2日	伊坂城跡より全景写真撮影	9月13日	SH103遺物出土状況図作成
9月7日	平坦面下層部分遺構検出	9月21日	SH103周溝・柱穴検出状況写真撮影
9月8日	斜面部～下部の調査後測量	9月28日	SK105は複数土坑の重なりと判明・SH103の柱穴の1つにこぶし大の石で柱を固定したような状況確認
9月10日	下層遺構SK202・203検出・半裁	9月29日	SH103に数個の壁柱穴・南東部に出入り口施設のような浅い土坑を検出
9月14日	調査区西壁土層断面図作成	9月30日	SH103に排水溝を確認
9月24日	台風18号接近降雨のため作業中止	10月5日	全景写真撮影
9月27日	SK202完掘写真、SK203土層実測	10月6日	SH102・103完掘状況写真撮影

10月 8日 ラジコンヘリコプターによる航空写真
撮影

10月12日 SH103断ち割り調査

平成11年度（北地区②）

8月 4日 人力表土掘削開始
8月18日 溝状の遺構確認・横穴墓の想定も
8月19日 調査区南側に拡張のため伐採
8月23日 写真撮影
8月25日 調査区南壁土層断面図作成
8月26日 拡張部分レーダー探査
8月27日 拡張部横穴墓状遺構をセクション図化
しながら掘削
8月30日 横穴墓状遺構は自然の落込みと判断
9月 3日 調査後地形測量終了

平成11年度（北地区③）

8月12日 調査前写真撮影
8月18日 重機による表土掘削開始
9月 1日 SK109検出
9月 2日 SK110・111検出
9月 3日 SK109・110・111半裁
9月 8日 土層断面図作成・写真撮影
9月21日 陥し穴周辺再遺構検出
9月27日 調査区西側再遺構検出
9月29日 調査区南側再遺構検出
10月 4日 全景写真撮影
10月 5日 調査後地形測量
10月 8日 ラジコンヘリコプターによる航空写真
撮影
10月13日 調査終了・引渡し

平成12年度（東地区②）

10月11日 調査前測量
10月13日 調査前写真撮影
10月17日 重機による表土除去開始
10月24日 SK402検出
11月 1日 SK403検出
11月 7日 調査区下部にトレンチ設定・SK403よ
り瓦片・土器片出土
11月13日 SK402平面図作成
11月18日 SK403平面図作成

11月21日 地形測量

11月23日 調査終了

平成12年度（西地区①）

6月30日 調査前地形測量
7月 3日 調査前写真撮影
7月11日 重機による表土掘削開始
7月24日 東側斜面北端写真撮影
7月27日 SH302検出
8月 7日 東斜面下段の遺構検出・SK301検出
8月 8日 SH302検出状況写真撮影
8月 9日 SD303・304掘削
8月10日 SK301掘削・土層断面図作成
8月17日 SH302周辺の拡張
8月21日 SH302ベルト設定して掘削開始
8月24日 SK312から刀子出土・写真撮影
8月29日 SH302周溝・支柱穴検出
9月 1日 SH302床面で焼土ブロック確認
9月 7日 SH302土層断面図作成
9月14日 SH302完掘・写真撮影
9月19日 調査区西壁土層断面図作成
9月20日 全体遺構平面図作成
9月28日 ラジコンヘリコプターによる航空写真
撮影

平成13年度（A地区・B地区・D地区）

11月19日 D地区、重機による表土除去・人力掘
削・平面図作成
11月20日 D地区、調査区全景写真撮影
11月28日 A地区、範囲確認トレンチの3本内1
トレンチ終了
11月29日 A地区、2トレンチ終了
11月30日 A地区、3トレンチ終了
12月12日 B地区、重機による盛土・表土掘削
12月25日 B地区、調査区北側掘削終了
12月26日 B地区、掘削部分写真撮影

平成14年

1月 7日 B地区、斜面～谷底部分掘削
1月 8日 B地区、全景写真撮影
1月 9日 B地区、調査終了

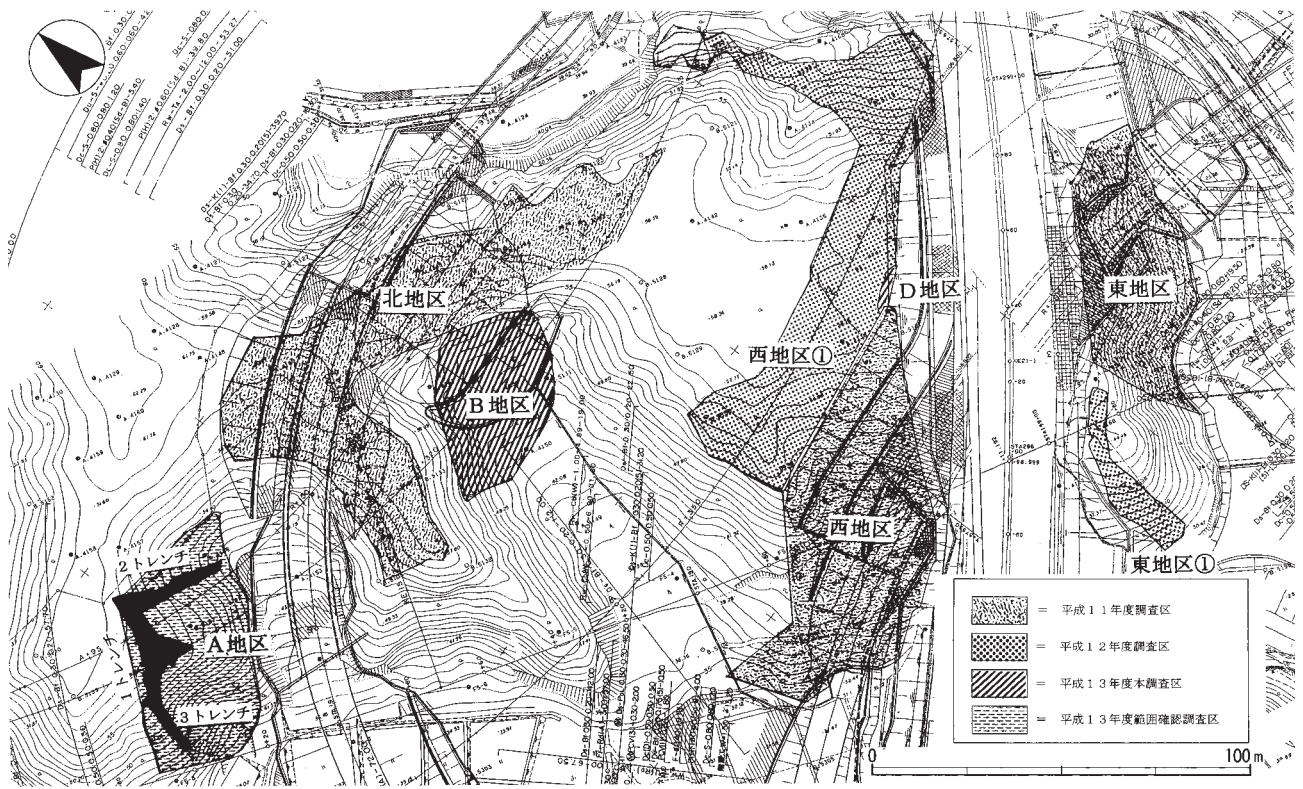


- 1：伊坂城跡 2：丸内遺跡 3：西ヶ広遺跡 4：伊坂遺跡 5：東海道想定地 6：菟上遺跡 7：東平古遺跡 8：金塚遺跡・同横穴墓群 9：城ノ谷遺跡
 10：広永城跡・同古墳群・横穴墓群 11：辻子遺跡 12：古川遺跡 13：山村遺跡 14：久留倍遺跡 15：大谷遺跡 16：永井遺跡 17：山奥遺跡
 18：間ノ田遺跡 19：下之宮遺跡 20：志氏神社古墳 21：高塚古墳 22：広古墳群 23：浄ヶ坊1号墳 24：八幡古墳 25：城ノ広遺跡 26：死人谷横穴古墳群
 27：繩生廃寺 28：額田廃寺 29：西ヶ谷古窯跡 30：西ヶ谷遺跡 31：萱生城跡 32：南浦遺跡

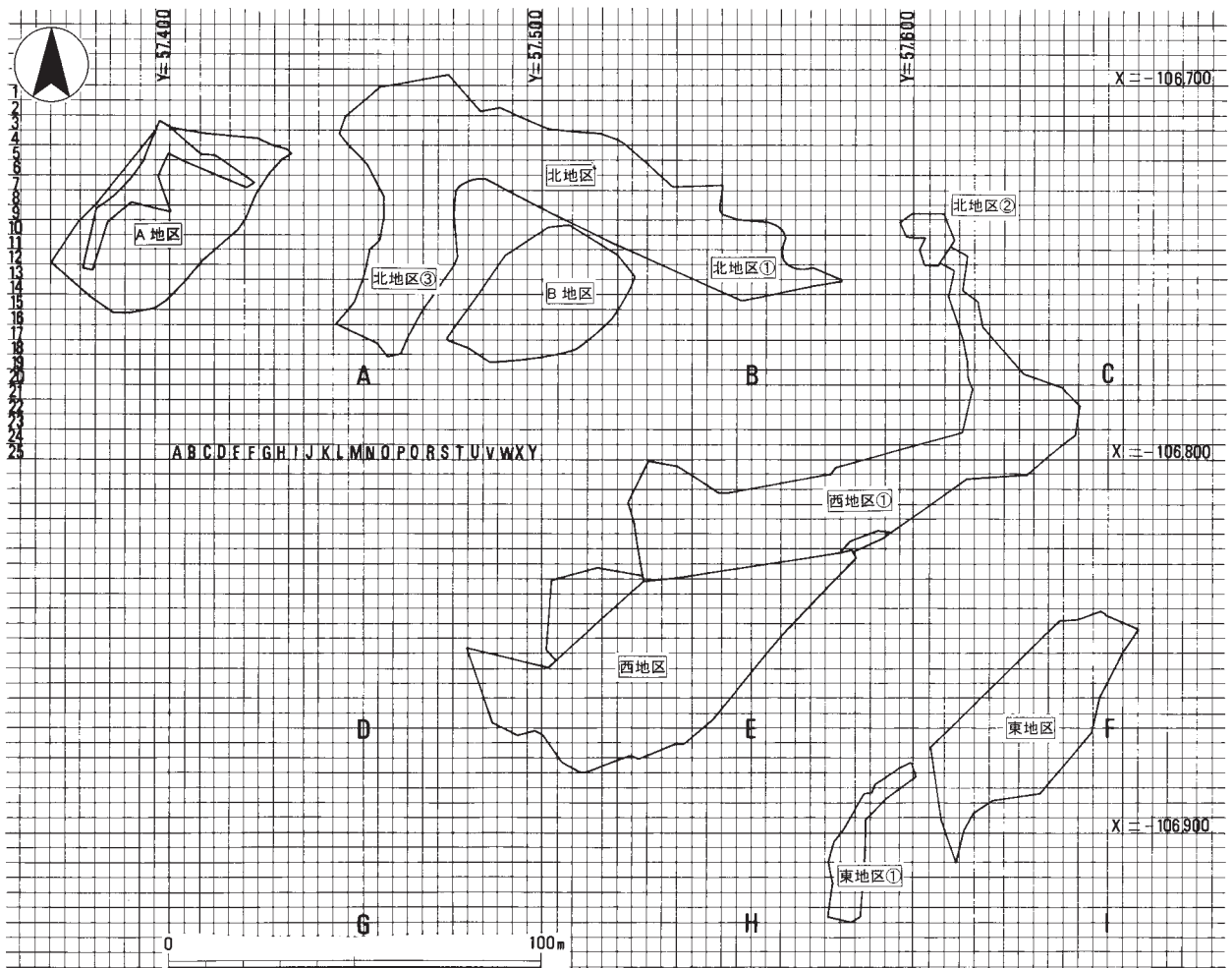
第1図 遺跡位置図 (1：50,000) [この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図 (桑名・菰野・四日市東部・四日市西部) を複製したものである。(承認番号 平15部復、第199号)]

No.	遺跡名	所在地	種別	面積(m ²)		平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	概要
				分布面積	調査面積							
1	伊坂城跡	四日市市伊坂町	城館跡	22,600	13,312			7,172	6,140			城の東端から尾根を縦貫して主郭に至る道を確認。その両側には屋敷地が配置されている。
					範 674	測量	範 674					
2	丸内遺跡	四日市市伊坂町	遺物散布地	2,600	0							弥生～室町時代の遺物散布がみられたが、遺構・遺物なし。
					範 120		範 120					
3	西ヶ広遺跡	四日市市伊坂町	集落跡 官衙跡	6,670	5,710			2,970	2,740			朝明郡衙の候補地。奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物を確認。掘立柱建物は台地の平坦部に、竪穴住居はその北の斜面を削りだして建てられている。
					範 442		範 328	範 44	範 70			
4	伊坂遺跡 銅鐸出土地	四日市市伊坂町	集落跡	26,100	12,364			8,320	3,250	794		江戸時代に扁平紐式袈裟樽文銅鐸が出土。古墳時代前期の竪穴住居を検出したほか、瓦窯の灰原を確認。
					範 260					範 260		
5	東海道想定地	四日市市伊坂町	道路跡	12,100	1,267			778			489	古代東海道の想定地。平成13年度の範囲確認調査では、道路に関連する可能性の考えられる溝1条が確認されている。調整池部分保存。
					保存6,300							
					範 950		範 256		範 275	範 419		
6	菟上遺跡	四日市市伊坂町	集落跡	33,300	29,118			13,598	15,520			弥生～奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物、弥生時代の方形周溝墓を確認。交差する県道路線予定地内述べ7,600㎡も調査。
					範 2,239		範 2,239					
7	東平古遺跡	四日市市山村町	遺物散布地	1,100	0							古墳時代以降の遺物散布がみられたが、遺構・遺物なし。
					範 54	範 54						
8	金塚遺跡・ 同横穴墓群 (旧金塚古墳群)	四日市市山村町	集落跡 横穴墓	5,390	3,976		3,976					丘陵頂部で弥生時代後期の高地性集落と墳丘墓2基、西尾根で横穴墓4基を確認。銅鐸片が出土。一部法面保存。
					保存340							
					範 419	範 149	範 270					
9	城ノ谷遺跡	四日市市広永町	集落跡	7,700	2,102		1,939	163				弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代の掘立柱建物を確認。
					範 523	範 348		範 175				
10	広永城跡・ 同古墳群・ 横穴墓群 (旧広永城跡)	三重郡朝日町 四日市市広永町	城館跡 古墳 横穴墓	2,600	970		970					方形周溝墓1基、横穴式石室1基、横穴墓6基(痕跡含む)を確認。城跡の堀・土塁を確認。
					範 316	範 316						
11	辻子遺跡	三重郡朝日町 四日市市広永町	集落跡 荘園関連	27,600	□13,533 保存 8,410		□8,818	□4,715				上層で中世の掘立柱建物群・条里溝等を確認。下層で弥生～古墳時代の竪穴住居・水田等を確認。橋脚間保存。県道事業で、□9,331㎡を本調査。
					範 937	範 937						
12	古川遺跡	三重郡川越町 三重郡朝日町	遺物散布地	18,800	0							範囲確認の結果、遺構なし。微量の遺物が出土したのみ(第二名神・北勢バイパスとも)。
					範 1,035	範 833	範 202					
13	山村遺跡	四日市市山村町	墓 集落跡	1,420	1,071			1,071				弥生時代の環壕2条・方形周溝墓1基等を確認
					範 110			範 110				
	合計13ヶ所		16遺跡	167,980	83,423 保存 15,050 範 8,079		15,703	38,787	27,650	794	489	
					範 2,637	範 4,089	範 329	範 345	範 679			

第1表 第二名神(愛知県境～四日市JCT)埋蔵文化財発掘調査経過表(分布面積(m²)は平成12年12月段階、□印は複数層の累計面積)



第2図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第3図 調査区地区割り図 (1 : 2,000)

Ⅱ 位置と環境

1. 地理的環境

当遺跡は、行政的には三重県の北部にある四日市市に属し、桑名市との境である朝日丘陵から派生する小丘陵上に位置する。伊勢平野北部のいわゆる北勢地域の地勢は、西側に古生層・花崗岩類から成る鈴鹿山脈が南北に連なり、断層崖に起因する急峻な東斜面の麓には標高30～100mの第三紀・第四紀層で構成される低平な台地・丘陵が海岸近くまで広がっている。鈴鹿山脈東麓から流れ出る員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川・内部川などの各河川は、台地・丘陵の間を開折して略東流し、下流域で急速に沖積低地を広げて伊勢湾に注ぐ。各河川の沖積低地は南北に連続し、海岸沿いに細長い平野を形成している。

鈴鹿山脈釈迦ヶ岳を源とする朝明川は、中流域で北岸の朝日丘陵と南岸の垂坂丘陵の間に約1km前後の谷底平野を形成し、下流域では一部天井化しつつも員弁川・海蔵川などにつながる沖積低地を形成している。この沖積低地には河川堆積物である花崗岩粗砂（所謂朝明砂）などによる自然堤防状の微高地が点在する。また、朝日・垂坂丘陵の東縁沿いに桑名断層が南北に通過しており、断層西側の丘陵内部では褶曲による地層の不整合がみられる。当遺跡は、桑名断層とその西の桑名背斜の間に位置する。

2. 歴史的環境

これまでに刊行した、概報（Ⅰ～Ⅴ）や本報告書（金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡・伊坂城跡）に詳細が記載されている。そのため、伊坂遺跡が、銅鐸出土遺跡ということもあり、弥生時代を中心に、縄文時代から古墳時代にかけてを概観するに止める（第1図）。

縄文時代 朝明川流域では、中流域の鶴沢遺跡・野呂田遺跡・大丸遺跡、下流域の東平古遺跡（7）で石器類が表採され、西ヶ広遺跡（3）では縄文時代後期の土坑が確認されている程度であった。昨年、員弁川の中流南岸の南浦遺跡（32）において、晩期の

土器棺が数基確認され、また石刀も出土し、沖積地での遺跡の存在を明らかにした。それに加え今回、当遺跡で陥し穴が確認されたことにより、徐々に周辺の縄文時代の様相が明らかになりつつある。

弥生時代 前期の遺跡として、まず海蔵川・三滝川に挟まれた生桑丘陵東端の大谷遺跡（15）・永井遺跡（16）があげられよう。数条の環壕や竪穴住居・方形周溝墓が確認されており、後期まで続く、拠点集落と考えられている。

一方朝明川の流域では、確実に前期に遡る遺跡は、現在までのところ確認されていない。しかし、県内では津市の納所遺跡・鈴鹿市の上箕田遺跡など沖積地の所在する遺跡もあり、標高10m前後の微高地に所在する北岸の辻子遺跡（11）・間ノ田遺跡（18）や、南岸の下之宮遺跡（19）・下ノ宮南遺跡の周辺で、今後確認される可能性も考えられよう。

中期になると、朝明川の北岸では菟上遺跡（6）・山村遺跡（13）が、南岸では久留倍遺跡（14）にその足跡が認められる。菟上遺跡では、中葉から後葉にかけての棟持柱式掘立柱建物や80棟以上もの竪穴住居などが、山村遺跡では20基の方形周溝墓や環壕1条が確認されており、当時期の墓域であると考えられている。また、久留倍遺跡では、現在も調査中であるが、中期の竪穴住居や方形周溝墓が検出されつつある。詳細は今後の調査によって判明すると思われるが、朝明川を挟んで沖積地をも見下ろす丘陵上に位置し、菟上遺跡と双壁を成す拠点集落になる可能性もある。

後期になると丘陵上の遺跡が更に増え、防衛的な性格を持つ遺跡が存在するようになる。朝日丘陵南縁にある西ヶ広遺跡（3）では、一辺10mの大型住居を含む、約30棟の竪穴住居が確認されている。環壕の存在は不明ではあるが、標高20m以上の段丘崖と段丘に切り込む2本の谷によって、防衛性が確保されていると推定される。また、金塚遺跡（8）では、標高約75mの丘陵頂部の狭い平坦地に竪穴住居10数棟とそれを取り囲むかのように環壕が確認され

た。また、特筆すべき遺物として銅鐸の鈕の破片が
竪穴住居から出土している。城ノ谷遺跡(9)では、
焼失家屋1棟を含む竪穴住居6棟が確認されている。
遺跡範囲の大半は団地造成などさまざまな改変によっ
て消滅しており、詳細は不明と言わざるを得ないが、
遺跡中央の南北2方向から細長い谷地形があり、環
壕の存在もしくは、西ヶ広遺跡同様な防御性が確保
された遺跡の可能性も捨てきれない。

一方、朝明川南岸の垂坂丘陵に所在する山奥遺跡
(17)では、五角形の竪穴住居を含む、100棟を超える
竪穴住居が確認されている。また、間ノ田遺跡(18)
や下之宮遺跡(19)のように沖積地の微高地に立地す
る遺跡も認められている。

今回報告する伊坂遺跡(4)では、文久2(1862)
年、通称、重地山から扁平鈕式袷袢文の銅鐸が出
土している。東側の谷を挟んで向かいに広がる菟上
遺跡との関連性が考えられている。また、朝明川南
岸の大矢知町青木山では、宝鐸の出土が伝えられる。
この宝鐸が銅鐸であるかの詳細は不明であるが、銅
鐸だとすると、朝明川を挟んで存在することになり、
菟上遺跡と久留倍遺跡との関係も興味深いことにな
ろう。

古墳時代 この北勢地域北部を代表する前期古墳
として志氏神社古墳(20)がある。所在する場所は、
朝明川流域ではなく、その南約2kmに東流する米
洗川と海蔵川とに挟まれた標高約10mの低丘陵の東
端である。この古墳は、現存する四日市市唯一の前
方後円墳(もしくは前方後方墳)で、内行花文鏡・
車輪石などが出土している。その位置は、朝明川・
海蔵川・三滝川をも視野に含んだ場所であり、弥生
時代後期に行われた各流域の集落間の政治的緊張関
係が統一されたことを物語るようでもある。その他
には、員弁川北岸の丘陵上に前方後円墳の高塚古墳
(21)が存在する。三角縁神獣鏡が出土した可能性の
ある古墳である。また、菟上遺跡から、滑石製合子
形石製品の蓋が出土しており、また伊坂遺跡からは、
銅鐸とともに、勾玉・管玉なども見つかったこと
から、残存しないが、前期古墳が存在していた可
能性も十分に考えられる。

中期では、方墳を主体とする広古墳群(22)がある。

B1号墳は、一辺31mで墳丘の南辺の偏った位置に
造り出しが付く特異なものである。その東に位置す
る浄ヶ坊1号墳(23)は、径36mの円墳とされている
が、方墳の可能性もあり、広古墳群の周辺には比較
的大形の方墳が集中している。その他、朝明川の谷
底平野をのぞむ丘陵・台地縁辺部を中心に単独もし
くは数基から十数基程度の小規模な古墳群が存在す
る。これらはほとんど後期の築造と考えられる。

内部主体が判明しているものは少ないが、南岸の
八幡古墳(24)は複室形態の構造の横穴式石室として
知られている。朝明川北岸の城ノ広遺跡(25)では、
削平された前方後円墳が新たに発見された。現在確
認されていないこのような古墳も多いと思われる。

朝明川南岸の死人谷横穴古墳群(26)は、金銅製環
頭大刀柄頭が出土した横穴墓として知られている。
北岸では、県内では本格的な横穴墓の調査となった、
当事業で発掘調査した、金塚横穴墓群(8)や広永
横穴墓群(10)、県道の改良事業に伴って調査した菟
上遺跡(6)の横穴墓などのより、朝明川流域にこ
の形態の墓が多く存在することを明らかにした。

古墳時代の集落跡としては、当遺跡のほか、西ヶ
広遺跡・山奥遺跡でも竪穴住居がみられ、弥生時代
より継続して人々が生活を営んでいたことが窺い知
れるが、あまり大規模な集落の調査例がないため、
不明なところが多い。(服部芳人)

(主な参考文献)

- ・小玉道明他1970『西ヶ広遺跡』『日本道路公団東名阪道路埋蔵文
化財調査報告』三重県教育委員会
- ・小玉道明他1973『四日市の後期古墳』四日市市教育委員会
- ・鈴木敏雄1938『三重県三重郡八郷村考古誌考』
- ・竹内英昭1996『員弁川流域と三滝川流域』『日本の古代遺跡52三
重』保育社
- ・八賀晋他1993『四日市市史第三巻資料編考古Ⅱ』四日市市
- ・服部貞蔵他1988『四日市市史第二巻資料編考古Ⅰ』四日市市
- ・早川裕己1988『纏生庵寺跡発掘調査報告』朝日町教育委員会
- ・弥永貞三・谷岡武雄1979『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出
版
- ・四日市市教育委員会2001『四日市市文化財保護年12—平成12年度—』

Ⅲ 調査の成果

1. はじめに

伊坂遺跡は、四日市市伊坂町字鏡谷に所在し、江戸時代末の文久2年(1862)に、扁平鈕式の銅鐸が出土したことで知られている遺跡である。

朝明川の沖積平野からやや奥まった、標高約60mの丘陵上に位置する。現在、この丘陵の北西側が団地造成によって削平されているため、一見すると独立丘陵状に見えるが、本来は南東方向に伸びる細長い丘陵であった。当遺跡は、この丘陵の東先端部に位置し、南側から大きな谷地形が入り込んでいるその東側部分を、地元では重地山と呼んでいる。なお、現在重地山の東端は、南北に走る東名阪自動車道によって分断されている。

2. 調査概要

調査の結果、銅鐸に直接関連する遺構・遺物は確認されなかったが、以下に記述する様々な時代の遺構・遺物を検出することができた。縄文時代と考えられる陥し穴、弥生時代の土坑、古墳時代前期の竪穴住居・土坑(土坑墓を含む)、古墳時代後期の古墳の周溝、白鳳から天平時代の瓦窯の灰原、時代不明の掘立柱建物などである。以下に、調査区別の概報を記述する。(服部芳人)

(1) 東地区(第4図) …平成11年度調査

調査区は東名阪自動車道の東に位置する。重地山の丘陵東側斜面にあたり、元来一続きであったものが同自動車道により分断されて現況では独立した形状を呈している。調査区は全面が傾斜約30~50°の急斜面で、斜面上端に2カ所の小尾根の高まりがみられる。斜面裾部分にはテラス状の平坦部分が巡るなど、遺構の存在が期待された。

調査の結果、斜面上端には東名阪自動車道建設時の残土がみられ、斜面部分は表土・流出土を除去すると砂質土の地山層となり、土坑1基とピットが3個検出できたのみである。(片岡 博)

(2) 東地区①(第4図) …平成12年度調査

東名阪自動車道の東側にあたり、丘陵の南側斜面を調査した。調査区は南北に細長く、北側部分には若干平坦面が存在する。検出した遺構は、耕作の区画溝1条・土坑1基・瓦窯の灰原の一部である。出土遺物には、須恵器片・平瓦がある。(服部芳人)

(3) 西地区(第4図) …平成11年度調査

東名阪自動車道の西側が西地区となる。調査区は地形からみて、重地山丘陵頂部の平坦部南端と丘陵南斜面とに大別できる。この内、遺構が確認されたのは丘陵頂部に限られ、古墳周溝1基・焼土塊を含む不整形土坑2基などを検出した。

斜面部分では場所により基盤層が異なり、検出作業は困難を極め、遺構は確認されなかった。また、調査前から標高45~46mの等高線に沿って崖がみられ、地滑り痕跡の可能性が指摘されていた。そのため、調査の最終段階でトレンチを入れ、土層の堆積状況・遺構の有無の確認を行った。その結果、基盤層は赤褐色粘質土層・礫層・灰白色シルト層で構成され、標高約51mで不整合面がみられるが、それ以下はほぼ水平堆積となっていた。崖地形はこの水平堆積層を削り込んでいるため、地滑りなどではなく人為的な削平の結果であると判断した。おそらく上述の不整合面が、第四紀中位段丘に相当する層と第三紀東海層群に相当する層の境であると思われる。

(原田恵理子)

(4) 西地区①(第4図) …平成12年度調査

重地山の丘陵頂部の平坦面南側とその東側斜面を調査した。このうち、遺構が確認されたのは平坦面に限られ、古墳時代前期の竪穴住居1棟・土坑数基(土坑墓を含む)・時期不明の掘立柱建物2棟・溝などを検出した。出土遺物には、土師器の甕・壺・高杯・小型丸底壺・鉄製の刀子などがある。

(5) 北地区(第5図) …平成11年度調査

重地山の丘陵頂部の平坦面北部(北地区①と仮称)とその北側斜面途中の小さな平坦面(同②)、さらに

西側へ鞍部状の細い尾根を経て西側に広がる平坦面（同③）を調査した。

ア 北地区①

古墳時代前期の竪穴住居 4 棟・焼土を含む土坑などを検出した。出土遺物には、土師器の甕・高杯などの他、鉄鎌や砥石がある。

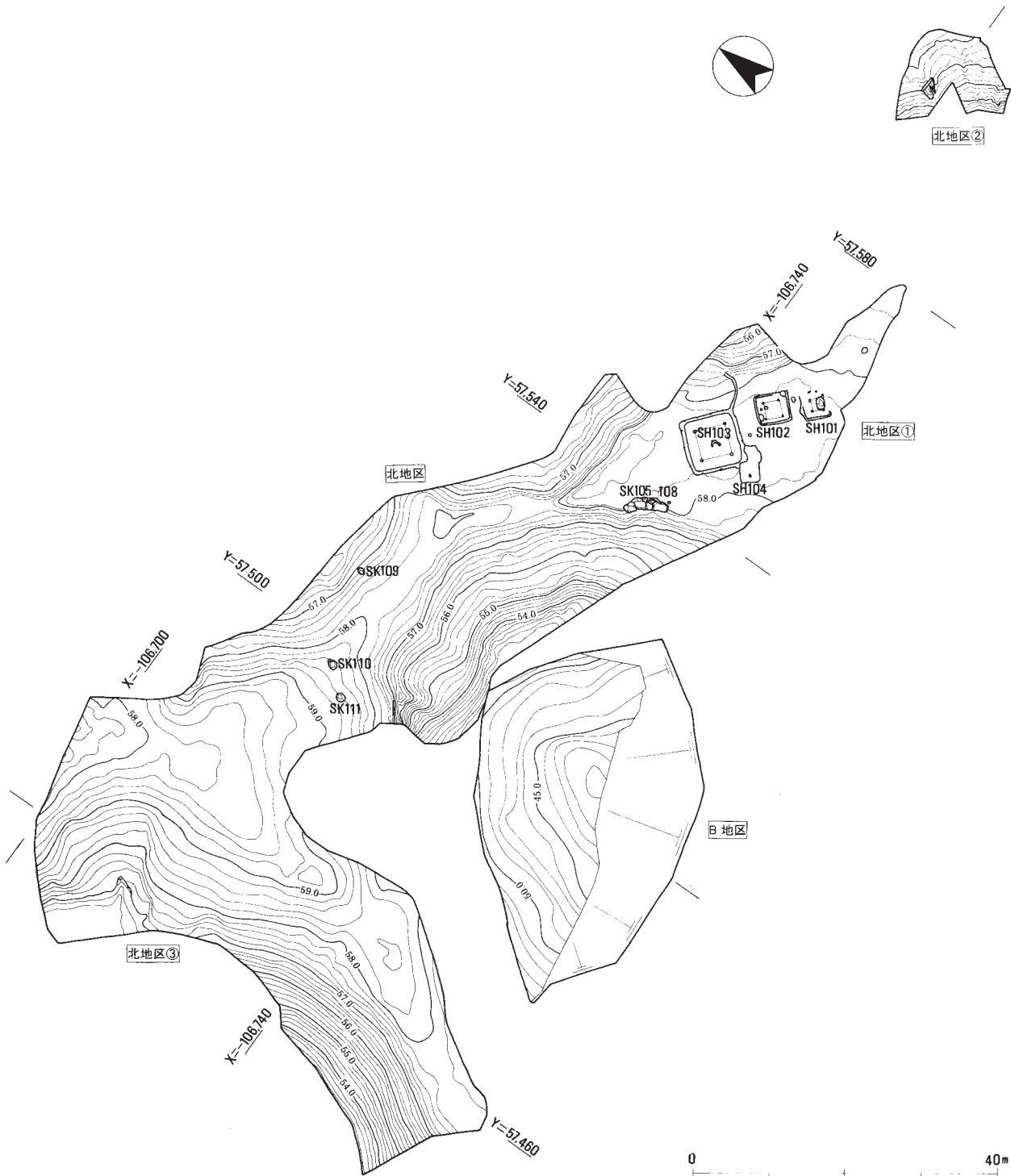
イ 北地区②

調査中に横穴墓の存在も想定されたためレーダー探査も行ったが、結果的には明確な遺構は検出されなかった。なお、鉛の丸玉が 1 個出土した。

ウ 北地区③

縄文時代と思われる陥し穴 3 基を検出した。

（服部芳人）



第 5 図 北地区・B地区遺構平面図（1：800）

(6) B地区(第5図)…平成13年度調査

平成11年度調査区(北地区)の隣接区域であるが、本来、西北を奥として南に開口していく谷地形となっている。調査地は、工事車輛用の道路敷設により盛土がなされていたため、それを撤去した後の調査となった。すり鉢状地形により、全斜面の一斉検出は困難なため、廃土を移動させながら掘削した。東側は盛土を残したまま、南面から西面及び北面にかけての斜面を調査した。

谷奥にあたる部分は、平成11年度調査区(北地区)から谷へ下る隣接斜面で、途中のテラス状平坦部を経て、急角度で落ち込む地形となる。谷の上部では竹林跡の表土下約1mで、基盤層と見られる硬い灰白色粘土層が確認される。しかし、谷底に向けて黄褐色の砂礫が厚く堆積し、谷の最も深い地点では、砂礫層が4mにも達していた。

この堆積層は、砂層と礫層の互層に細かく分層できる。これは、斜面勾配によって勢いを増したためと考えられる。

砂礫層の下層は、青灰色粘質土層・黄褐色砂質土層と続き、その下に黒褐色において遺構・遺物は確認できなかった。

黒褐色粘質土層の直下には、小石を含んだ暗赤褐色の層が南北に溝状に通っており、この底部から須恵器片が出土した。いずれも内側に同心円状のあて具痕が見られるが、小片であるため、時期は不明である。

谷の最深部では遺物のみが確認でき、遺構は確認できなかったことから、これらの遺物は、旧表土が流出する以前に、斜面上位の平坦部から流れ込んだものと考えられる。

(7) D地区…平成13年度調査

平成12年度の調査区(西地区)に隣接した丘陵平坦面である。西地区では、古墳時代前期の住居遺構が確認され、同時期の墓と思われる土坑も検出されている。また、平成11年度調査で弥生時代の土坑を検出した東地区の上位にあたることから、銅鐸関連遺構の存在も期待された。しかし、調査範囲が狭いこともあり、遺構・遺物とも確認できなかった。

(松田珠美)

3. 遺構と遺物

(1) 縄文時代

陥し穴(SK109・110・111・320)

4基の陥し穴を検出した。いずれも直径約1mの円形を呈し、深さは約1.5mである。SK109は断面の形状が下部で膨らむが、他の3例については、ほぼ垂直に円筒状に掘削され、穴底の中央に1個、杭跡と思われるピットがある。出土遺物がなく、時期の決定ができないが、立地・形状から縄文時代の陥し穴と考えたい。

SK109(第6図) 北地区③の鞍部から若干下った斜面で検出した。形状は円形で、規模は0.95m×0.82m、下方部分はやや袋状に膨れ、深さは1.4mである。出土遺物はない。

SK110(第7図) 北地区③の鞍部で検出した。直径1.2mの円形で、垂直に深さ1.4m掘削される。穴底の中央に、1個杭跡と思われる小穴が、0.35m掘られる。出土遺物はない。

SK111(第8図) SK110の南西で検出した。形状は円形で、規模は1.14m×1.26mで、深さは1.34mである。穴底中央に、SK110と同様な小穴が、0.30m掘られる。出土遺物はない。

SK320(第9図) 西地区①の平坦面で検出した。形状は円形で、規模は1.5m×1.2m、深さは0.9mである。風倒木の可能性を考慮しており、土層断面図を作成することなく掘削を行ってしまった。穴底中央に、小穴が0.15m掘られる。出土遺物はない。

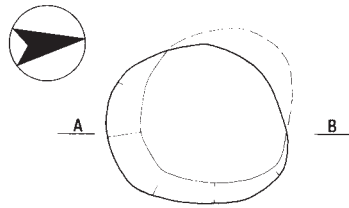
(2) 弥生時代

土坑(SK1・202・203・204)

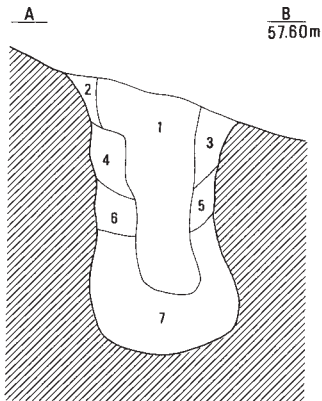
4基の土坑を検出した。東名阪自動車道を挟んで、SK1は東側で、他の3基は西側での検出である。

現在では、東名阪自動車道部分の地形の詳細は不明であるが、重地山の頂部平坦面の東側に、これら弥生時代の遺構は偏っていることになる。(服部芳人)

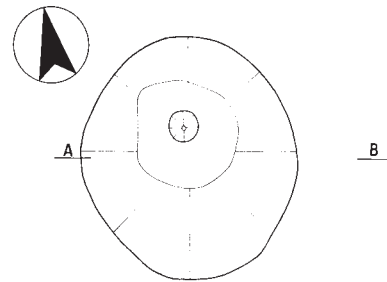
SK1(第10図) 東地区の斜面上端近く、標高約50m付近の鞍部で検出されたもので、長径2.7m短径2.2m、平均的深さ0.4mの不整形なものである。埋土からは弥生土器の小片が出土したが、表面の風化が激しく、器種や時期の特定はできない。斜面流出土から高杯の脚部が出土した。(片岡博)



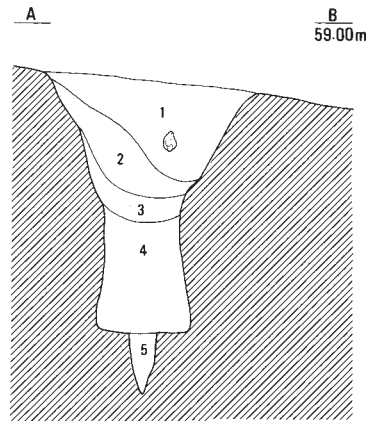
SK109



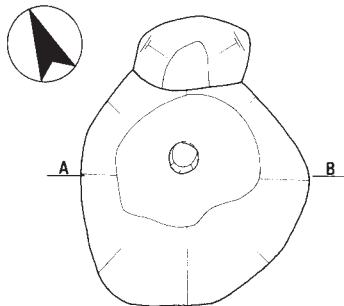
- (層名)
- 1: 2.5YR 6/6 明黄褐色土
(直径5mm小砂利主体)
 - 2: 10YR 6/8 明黄褐色土
(灰白色・橙色シルトブロック混じる)
 - 3: 10YR 6/8 明黄褐色土
(風化した花崗岩粒微量)
 - 4: 10YR 6/8 明黄褐色土
(直径3mm以下小砂利含む・第3層に対応か?)
 - 5: 10YR 6/6 明黄褐色土
(直径5mm小礫微量含む)
 - 6: 10YR 6/6 明黄褐色土
(直径5cm以下の小砂利微量に含む・第5層に対応か?)
 - 7: 10YR 6/8 明黄褐色土
(直径10cm以下の礫微量に含む)



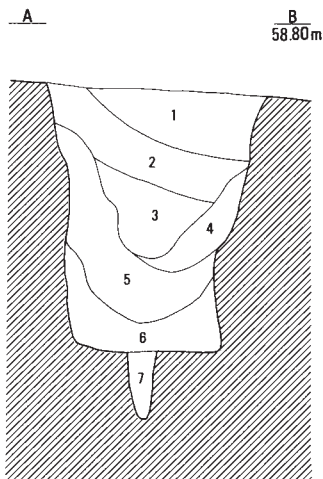
SK111



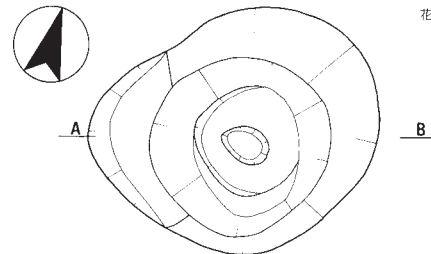
- (層名)
- 1: 2.5YR 5/6 黄褐色土
(直径1mm風化した花崗岩粒少量含む)
 - 2: 10YR 6/8 明黄褐色土
(第1層に類似・より赤みが強い)
 - 3: 10YR 6/6 明黄褐色土
(直径1cm以下の小砂利多く含む)
 - 4: 2.5YR 6/8 明黄褐色土
(直径3cm小礫多量に含む)
 - 5: 2.5YR 6/6 明黄褐色土
(粒痕・直径5mm以下の風化した花崗岩少量含む)



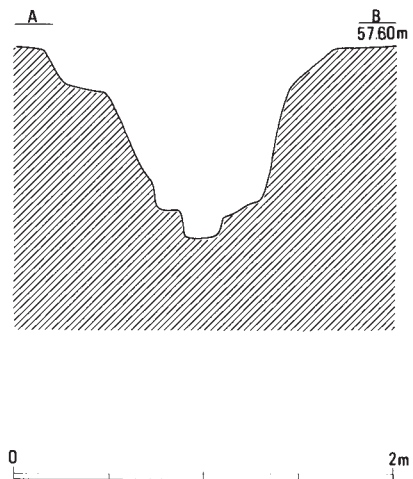
SK110



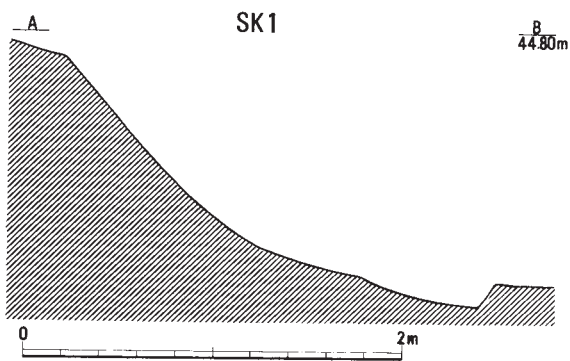
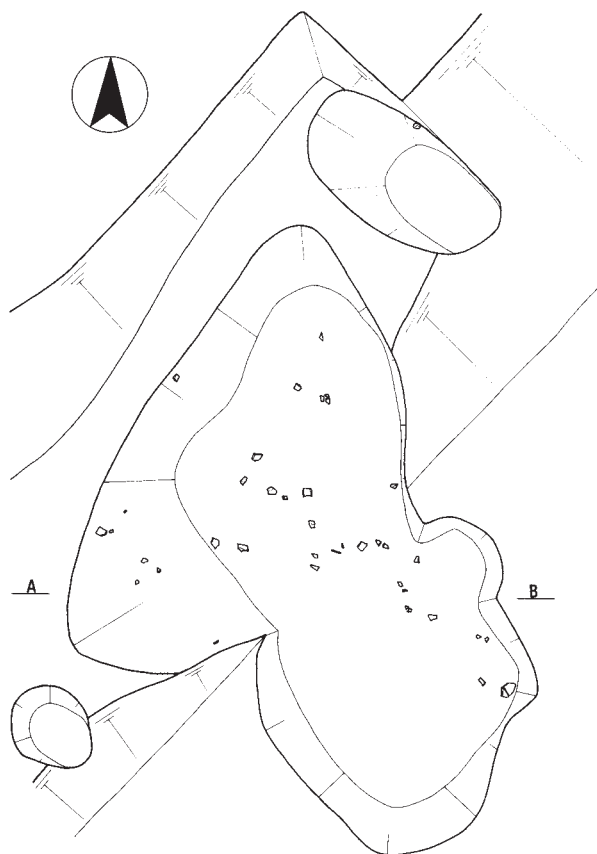
- (層名)
- 1: 2.5YR 5/6 黄褐色土
(直径4cm以下の小砂利少量含む)
 - 2: 2.5YR 6/6 黄褐色土
(直径3cm以下の小砂利微量に含む)
 - 3: 10YR 6/8 明黄褐色土
(炭化物少量含む)
 - 4: 10YR 6/6 明黄褐色土
 - 5: 7.5YR 5/6 明褐色土
(直径2cm以下の小砂利多く含む)
 - 6: 2.5YR 6/8 明黄褐色土
(直径5mm以下の小砂利多く含む・山砂ベース)
 - 7: 2.5YR 6/6 明黄褐色土
(粒痕・シルトベース・粘性締りともにかなり強い)



SK320



第6図 SK109・110・111・320実測図(1:40)



第7図 SK1実測図 (1:40)

SK202 (第11図) 西地区の平坦面で検出した。後述する古墳の周溝SX201等の遺構検出・掘削の後、周辺の土が若干濁っており、同じ面での検出は困難であった。そのため検出面を下げて確認された遺構である。規模は、1.4m×1.2mの隅丸形状で、残存の深さは0.15mである。埋土には焼土ブロックが混入しているほかは、出土遺物はない。

SK203 (第11図) 西地区の平坦面で検出した。SK202同様、検出面を若干下げて確認できた遺構である。規模は、0.6m×0.7mの略円形を呈し、残存の深さは0.1mである。埋土に焼土ブロックを含むが、遺物の出土はない。

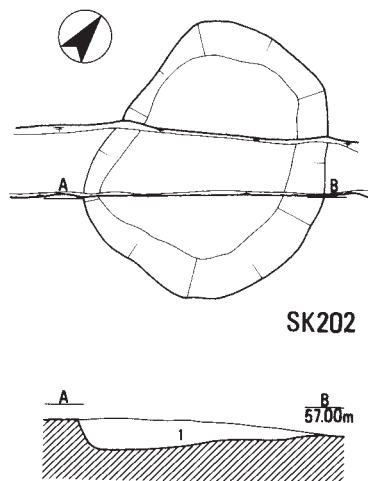
SK204 (第11図) 西地区の平坦面から南斜面の変換する場所、調査区の北壁で検出した。規模は、0.6m×1.0mで、残存の深さは0.1mである。出土遺物はない。

(3) 古墳時代

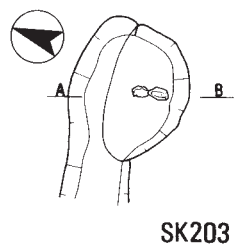
ア 竪穴住居 (SH101・102・103・104・302)

北地区で4棟、西地区①で1棟検出した。調査区は離れるが、いずれも重地山の頂部平坦面に所在する。これら5棟の竪穴住居は、いずれも隅丸方形プランである。SH103とSH302は、排水溝を伴う。SH103はSH104に切られる。

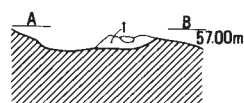
SH101 (第12図) 北地区①の調査区東側で検出した、一辺3.6m×3.7mの竪穴住居である。残存状態が悪く、南側周溝と西側周溝の一部が確認されたのみである。支柱穴は4本であるが、北東側の1本は



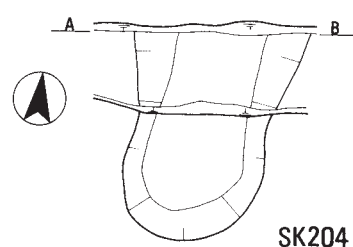
(層名)
1: 10YR 5/6 黄褐色粘質土 (焼土ブロック・炭含む)



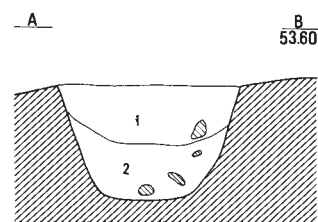
SK203



(層名)
1: 7.5YR 5/6 明褐色粘質土

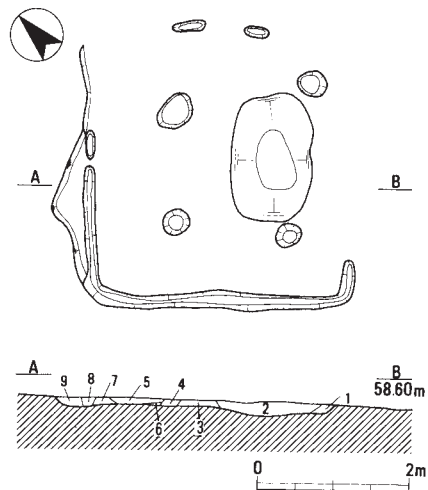


SK204



(層名)
1: 10YR 4/4 褐色粘質土 (直径2~3mm円礫多く混じる)
2: 10YR 5/6 黄褐色粘質土 (直径2~8mm礫・直径0.5~2mm白色砂粒多く含む)

第8図 SK202・203・204実測図 (1:40)



- (層名)
- 1 : 7.5YR 5/6 明褐色土 (小砂利・直径1~5mm風化した花崗岩粒含む)
 - 2 : 10YR 6/6 明黄褐色土 (擾乱もしくは風倒木)
 - 3 : 7.5YR 5/6 明褐色土 (小砂利・炭化物含む)
 - 4 : 10YR 4/4 褐色土 (擾乱)
 - 5 : 10YR 5/6 黄褐色土 (擾乱)
 - 6 : 10YR 6/8 明黄褐色土 (炭化物やや混じる)
 - 7 : 10YR 6/8 明黄褐色土 (炭化物・小砂利・花崗岩粒含む・6層と同じ)
 - 8 : 10YR 5/8 黄褐色土 (直径5mm褐色ブロック土含む・周溝埋土)
 - 9 : 2.5Y 5/6 オリーブ色土 (炭化物・小砂利わずかに含む)

第9図 SH101実測図 (1:100)

攪乱のため検出できなかった。遺構の平面検出中に、その上面で焼土と炭化物の痕跡を確認した。焼失家屋の可能性もある。また、床面の西側ほぼ中央に直径約30cmの硬化した部分も確認している。周溝の埋土から、土師器のS字口縁甕や高杯片が出土した。

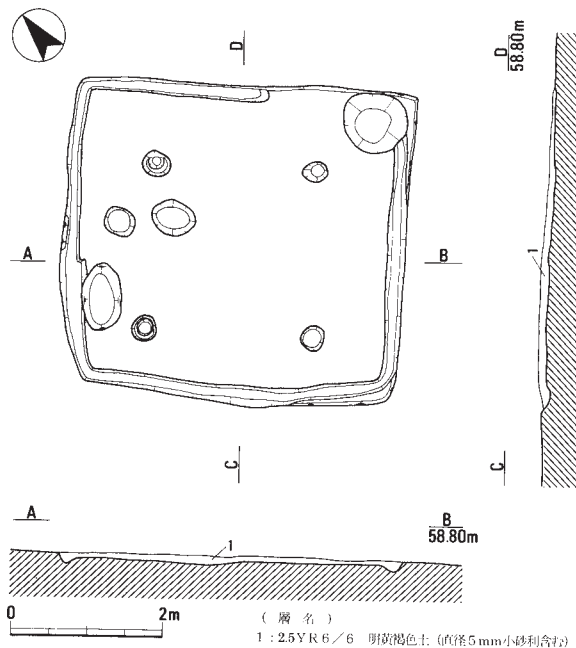
出土遺物 (第34図)

土師器S字口縁甕 (1) 口縁部が大きく外方へ拡張し、断面は緩やかなS字状を呈する。赤塚編年C類に相当する。

SH102 (第13図) SH101の北西で検出した、一辺4.5m×4.3mの竪穴住居である。支柱穴は4本で、北東隅に貯蔵穴、西側中央に炉跡を検出した。貯蔵穴は、直径0.85mの円形で、深さは0.2mで土師器片・礫・炭化物片が出土した。炉の規模は0.7m×0.5mの楕円形を呈し、深さは0.15mである。遺物の出土はややまとまりがあり、西側の周溝から土師器の壺・鉄製品の鎌、東側の周溝から土師器の高杯がある。

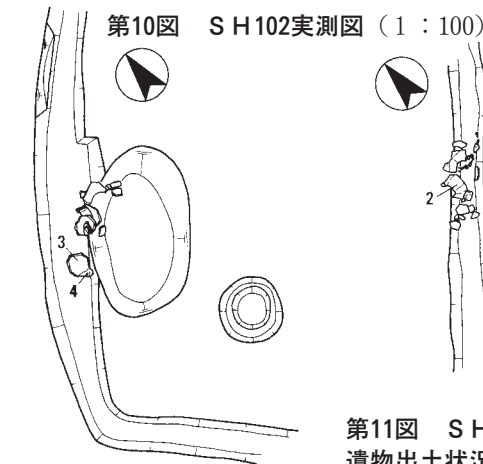
出土遺物 (第34図)

高杯 (2) 杯部の底部は直線的で、口縁部にかけて大きく外方に広がる。



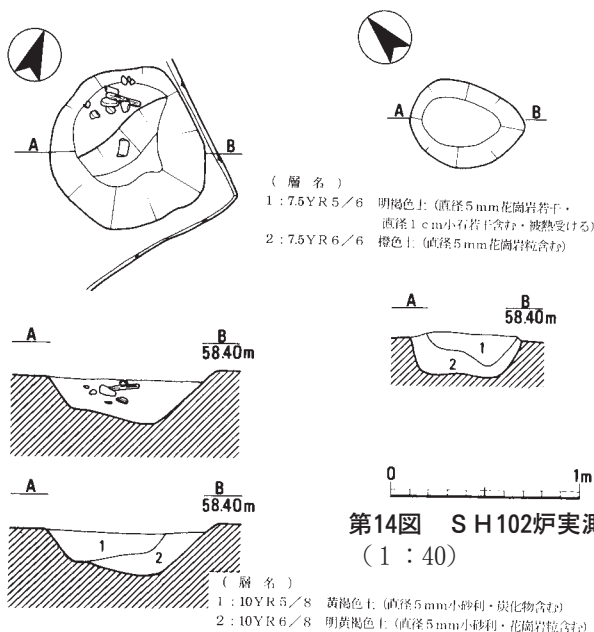
- (層名)
- 1 : 2.5YR 6/6 明黄褐色土 (直径5mm小砂利含む)

第10図 SH102実測図 (1:100)



第11図 SH102東周溝内遺物出土状況図 (1:40)

第12図 SH102西周溝内遺物出土状況図 (1:40)

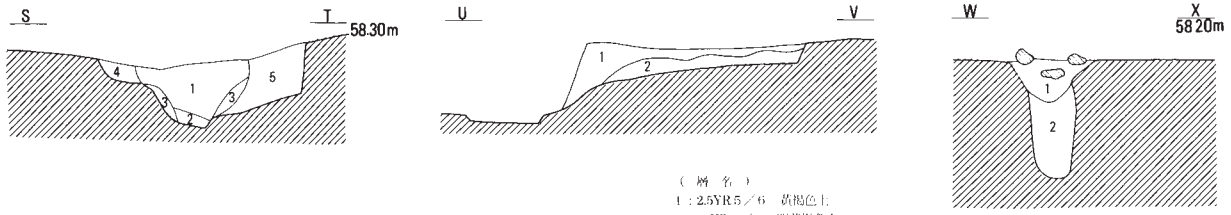


- (層名)
- 1 : 7.5YR 5/6 明褐色土 (直径5mm花崗岩若干・直径1cm小石若干含む・焼熱受ける)
 - 2 : 7.5YR 6/6 褐色土 (直径5mm花崗岩粒含む)

第14図 SH102炉実測図 (1:40)

- (層名)
- 1 : 10YR 5/8 黄褐色土 (直径5mm小砂利・炭化物含む)
 - 2 : 10YR 6/8 明黄褐色土 (直径5mm小砂利・花崗岩粒含む)

第13図 SH102貯蔵穴実測図 (1:40)

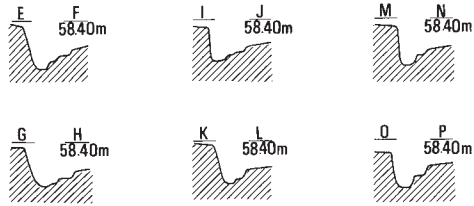


第17図 SH103出入口施設土層断面図 (1:40)

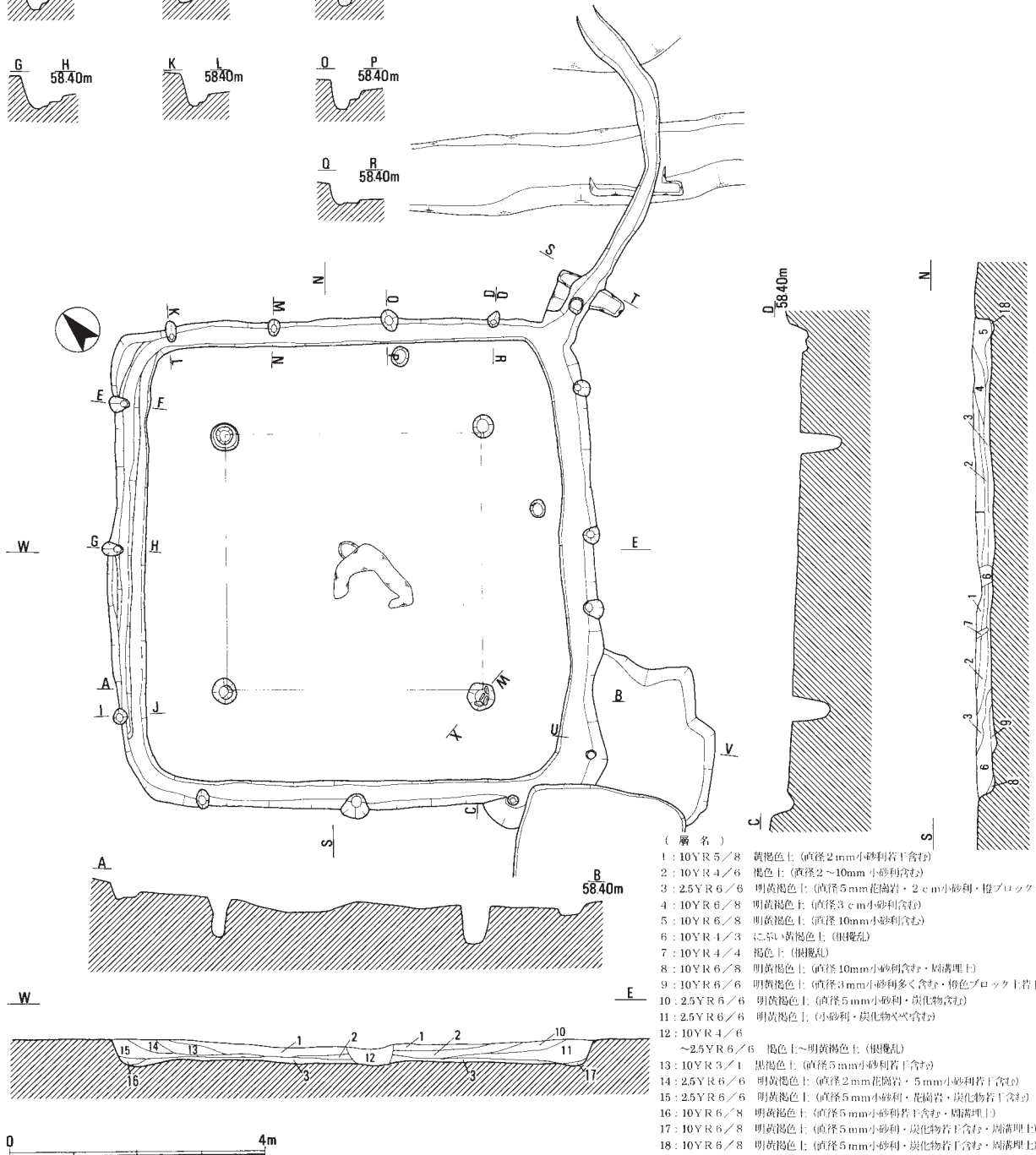
- (層名)
 1: 10YR 6/8 明黄褐色土 (直径3~5mm花崗岩・砂利含む)
 2: 2.5YR 6/8 明黄褐色土 (直径5mm小砂利若干含む)
 3: 10YR 6/8 明黄褐色土 (若干赤みを含む)
 4: 10YR 6/8 明黄褐色土

- (層名)
 1: 2.5YR 6/6 明黄褐色土 (炭化物含む・直径5mm小砂利を含む)
 2: 2.5YR 5/6 黄褐色土 (直径5mm小砂利・炭化物を含む)

第16図 SH103排水溝断面図 (1:40)



第18図 SH103南東部分柱穴断面図 (1:40)



第15図 SH103実測図 (1:100)

土師器壺 (3) やや短い内湾する口縁で、体部はやや扁平な球形を呈する壺である。

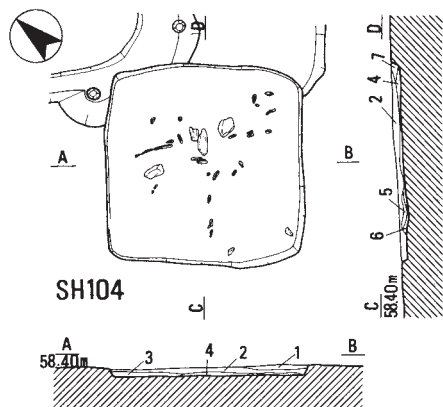
鉄製品鎌 (4) 刃先部分が欠けており、全体像は不明であるが、鎌と判断した。

SH103 (第17図) 北地区①の調査区西側で検出した、一辺が7.7 mの大形の竪穴住居である。幅0.4 mの周溝が全周し、その東隅から幅0.3 mの排水溝がゆるやかに弧を描いて北へ約6 m延びる。床面までの残存の深さは約0.4 mと残りは良い。

主柱穴は4ヶ所あり、径0.4 mで深さは約0.6 mと深く、柱間も約4 mと広い。南隅の主柱穴では、こぶし大よりやや大きい石4個が、床面と同じレベルで柱を囲む様な状態で検出された。柱の固定材の可能性もある。また、住居4辺すべての壁面で、計14ヶ所の壁柱穴を検出した。壁柱穴は、排水溝を挟む二辺に4ヶ所、他の二辺に3ヶ所存在する。いずれも径0.2 m前後で、壁面を0.1 m前後切り込んでおり、深さは周溝底より10cm程度掘り込んでいる。竪穴住居の南東の外側で2×2 mの浅い土坑を検出した。入口的な施設の可能性が考えられる。なお、炉・貯蔵穴は確認されなかった。また、土師器S字口縁甕片・高杯片などが床面から浮いた状態で多数出土した。

出土遺物 (第34図)

壺 (5~7) 5・6は、直口の口縁部で、端部



- (層名)
- 1: 10YR 5/8 明黄褐色土 (直径10mm 小砂利若干含む)
 - 2: 10YR 5/6 黄褐色土 (炭化物・直径5mm小砂利・焼土ブロック若干含む)
 - 3: 10YR 6/6 明黄褐色土 (炭化物・花崗岩や含む)
 - 4: 10YR 6/8 明黄褐色土 (直径10mm小砂利・花崗岩や含む)
 - 5: 7.5YR 5/8 明褐色土 (焼土ブロック主体・直径3mm燧炭化物含む)
 - 6: 10YR 6/8 明黄褐色土 (上部が比熱受ける)
 - 7: 10YR 4/6 褐色土 (炭化物・焼土ブロック・直径5mm小砂利含む)

第19図 SH104実測図 (1:100)

は丸いが、若干面を持つ。

土師器S字口縁甕 (8~19) 口縁端部は、緩やかに外方へ広がり、肥厚するものが多く、面を持つものもある。脚部の端部は、内側に折り返し肥厚させる。概ね、赤塚編年のD類に相当しよう。

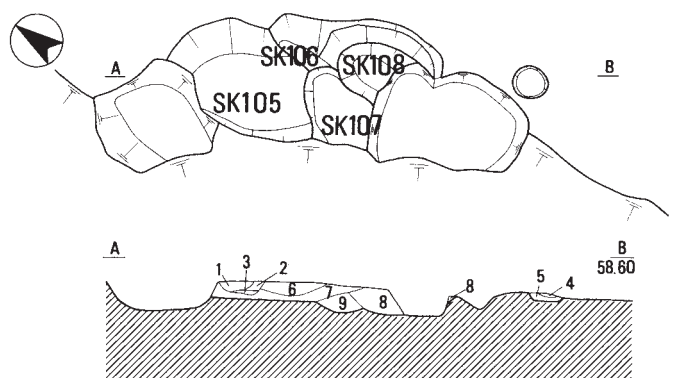
高杯 (20~30) 杯部の底部から緩やかに広がるもの (20・21) と、若干の稜を持って、大きく外方に広がり、端部をやや外反させるもの (22・23) がある。脚部には、脚柱部にやや膨らみを持ち、裾部にかけては屈曲して広がるものが多い。

SH104 (第21図) SH103の東南隅部分を切る形で検出した一辺2.6m四方の竪穴住居である。周溝、主柱穴、貯蔵穴、炉跡などは確認されなかった。遺構の検出中に、土師器S字口縁甕、砥石などが出土した。

出土遺物 (第34図)

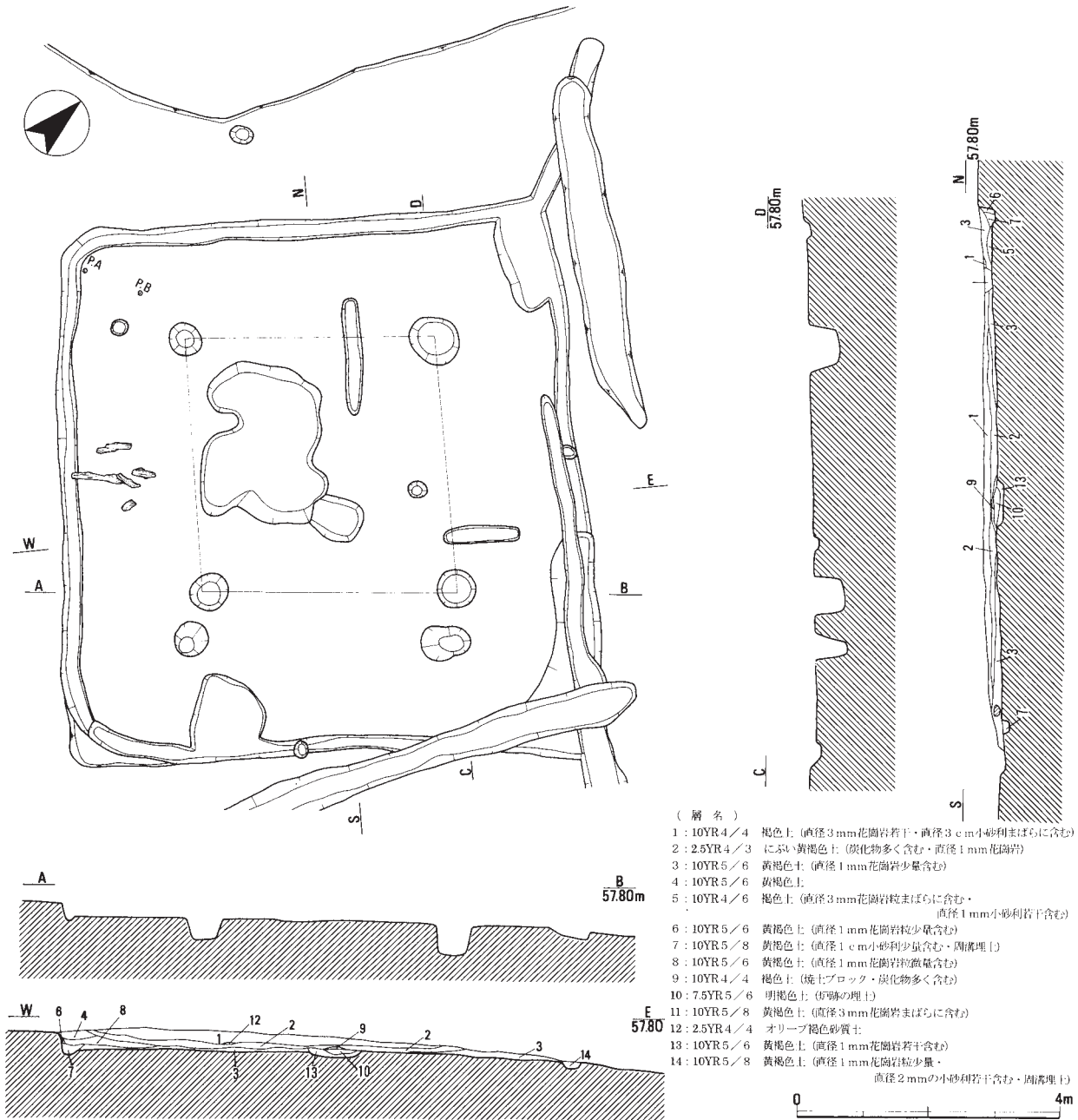
砥石 (31・32) いずれも、1面に使用痕跡が認められる。

SH302 (第23図) 西地区①の調査区中央、平坦面東隅で検出した一辺8.0mの大型の竪穴住居である。幅0.3mの周溝が全周し、その北隅から幅0.3mの排水溝が2.5m延びる。4ヶ所の主柱穴の南側にさらに2個の柱穴が存在するが、添木として使用されたか、拡張されたかは断定できない。中央には炉跡と考えられる焼土範囲が広がるが、通常に比べると非常に

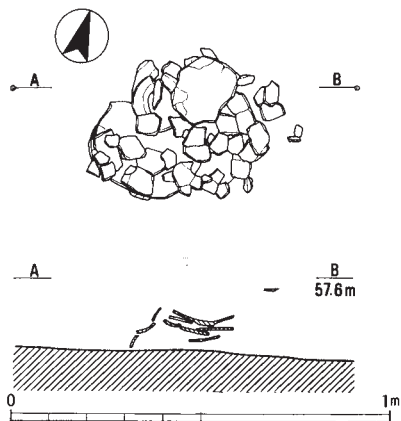


- (層名)
- 1: 7.5YR 5/8 明褐色土 (硬化した焼土ブロック・炭化物ブロックなど若干含む)
 - 2: 7.5YR 5/8 明褐色土 (炭化物・焼土粒など若干含む)
 - 3: 7.5YR 7/4 に近い橙色土 (白色粒・炭化物粒・焼土粒若干含む)
 - 4: 7.5YR 7/8 黄褐色土 (直径10mm燧・白色粒若干含む)
 - 5: 10YR 6/6 明黄褐色土 (直径2mmF白色粒含む)
 - 6: 10YR 6/8 明黄褐色土 (白色粒・炭化物粒・焼土粒若干含む)
 - 7: 10YR 6/6 明黄褐色土 (白色粒・炭化物粒・粘質土若干含む)
 - 8: 10YR 6/6 明黄褐色土 (白色粒・炭化物粒・焼土粒若干含む)
 - 9: 10YR 7/8 黄褐色土 (粘質土・白色粒若干含む)
 - 10: 10YR 6/8 明黄褐色土 (焼土粒若干含む)

第20図 SK105・106・107・108実測図 (1:100)



第21図 SH302実測図 (1 : 100)

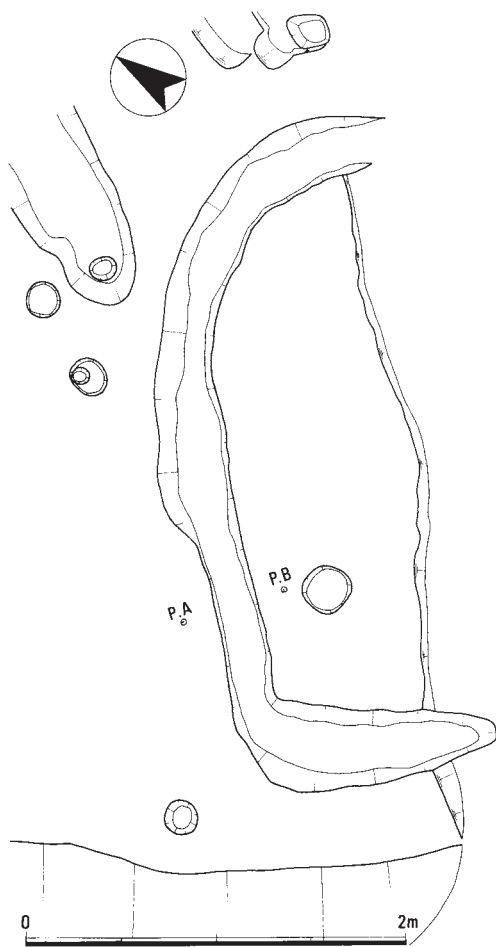


第22図 SH302遺物出土状況図 (1 : 20)

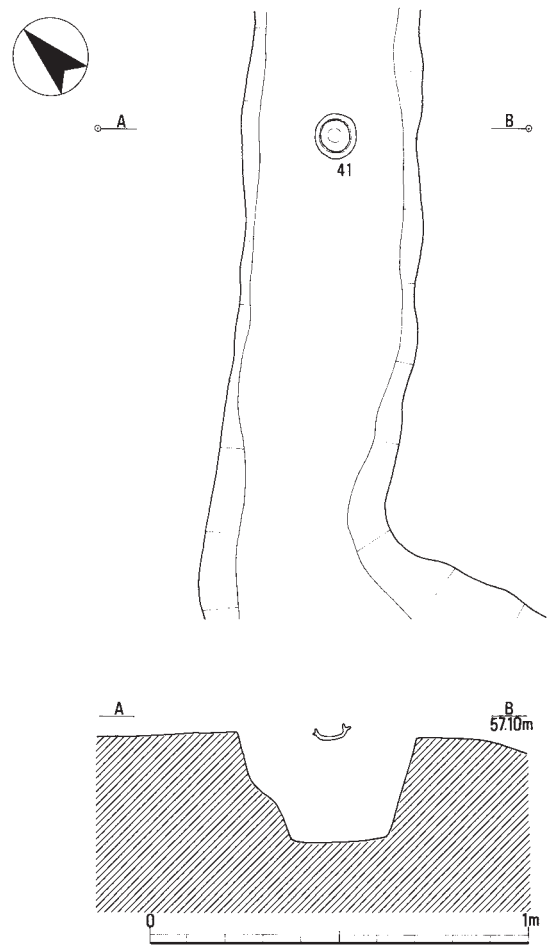
硬く焼けていることが特徴である。西側には壁柱に使用されたとされる炭化材が存在し、焼失家屋と考えられる。また、北東側には浅い溝が2条検出されたが、間仕切りの可能性もある。遺物は、北西隅でややまとまって土師器の甕が出土したほかは、細片が大半である。なお、埋土の篩がけにより、石鏃2点と、白玉1点が出土した。

出土遺物 (第35図)

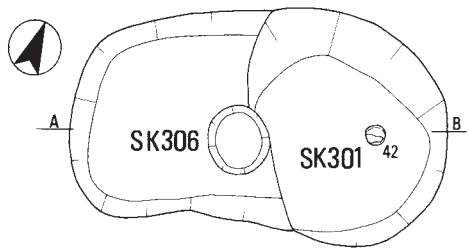
土師器壺 (33・34) 33の口縁は、くの字状にゆ



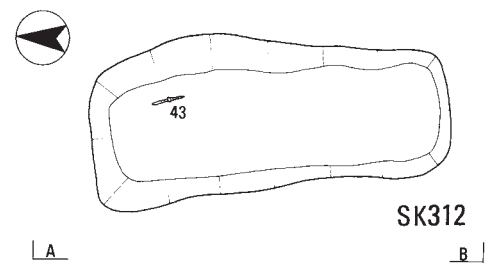
第23図 S X 201実測図 (1 : 40)



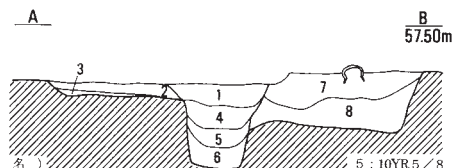
第24図 S X 201遺物出土状況図 (1 : 20)



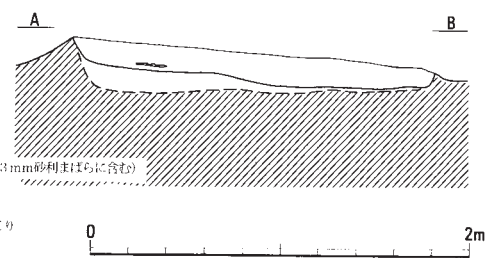
第25図 S K 301・306実測図 (1 : 40)

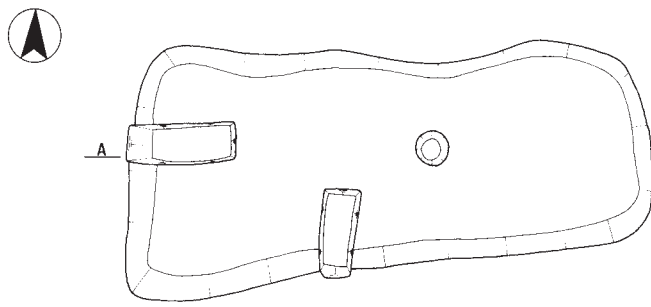


第26図 S K 312実測図 (1 : 40)



- (層名)
- | | | | |
|----------------|--------------------------|----------------|---|
| 1 : 10YR 4 / 6 | 褐色土 (直径1~2mm砂利・炭化物少量含む) | 5 : 10YR 5 / 8 | 黄褐色土 (直径1~2mm花崗岩粒・直径2~3mm砂利まばらに含む) |
| 2 : 10YR 5 / 6 | 黄褐色土 (直径1~2mm花崗岩粒まばらに含む) | 6 : 10YR 5 / 6 | 黄褐色土 (直径1cm焼土ブロック含む) |
| 3 : 10YR 5 / 8 | 黄褐色土 (直径1~2mm花崗岩粒まばらに含む) | 7 : 10YR 5 / 6 | 黄褐色土 (直径1mm花崗岩粒まばらに含む) |
| 4 : 10YR 5 / 6 | 黄褐色土 (炭化物少量含む) | 8 : 10YR 5 / 4 | にじみ黄褐色土と7.5YR 5 / 6明褐色土の混じり (直径2~5mm砂利まばらに含む) |

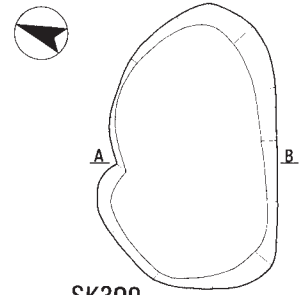
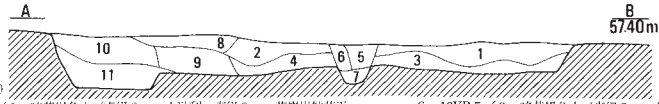




SK305

(層名)

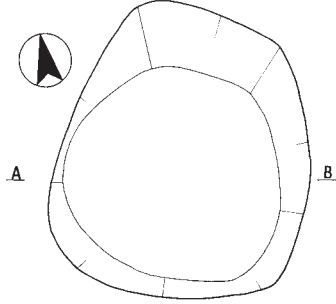
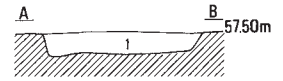
- | | |
|--|---|
| 1: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径2 cm小砂利・直径2 mm花崗岩粒若干・直径5 mm炭化物少量含む) | 6: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径5 mm花崗岩粒若干・直径1 mm炭化物若干・堆土粒若干含む) |
| 2: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径3 cm小砂利・直径1 mm花崗岩粒若干含む) | 7: 10YR 4/6 暗黄褐色土 (直径1 mm花崗岩粒・炭化物若干含む) |
| 3: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径1 mm花崗岩粒若干・直径2 mm炭化物若干含む) | 8: 10YR 4/6 暗黄褐色土 (直径1 mm花崗岩粒・炭化物若干・堆土粒多く含む) |
| 4: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径5 mm砂利若干・直径1 mm炭化物若干含む) | 9: 堆土層 (直径3 cm炭化ブロック含む) |
| 5: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径7 mm小砂利若干・直径1 mm花崗岩粒若干含む) | 10: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径5 mm小砂利若干・直径1 mm花崗岩粒少量・炭化物若干含む) |
| | 11: 10YR 4/6 暗黄褐色土 (直径2 mm花崗岩粒・直径2 mm炭化物若干・堆土粒多く含む) |



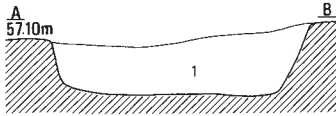
SK309

(層名)

- 1: 10YR 4/4 暗黄褐色土 (直径3 cm小砂利・直径1 mm花崗岩粒若干含む)

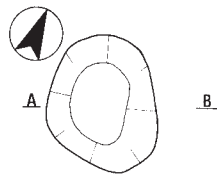


SK310

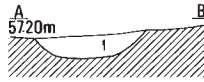


(層名)

- 1: 10YR 4/4 暗黄褐色土 (直径4 cm小砂利多く・直径2 mm花崗岩粒若干含む)

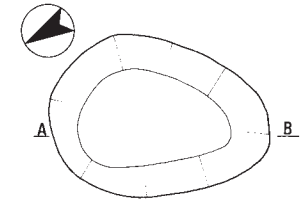


SK311

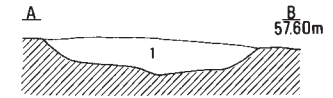


(層名)

- 1: 10YR 4/6 暗黄褐色土 (直径1 cm小砂利若干・花崗岩粒若干含む)

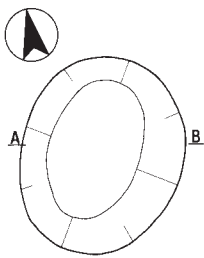


SK313



(層名)

- 1: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径5 cm小砂利若干・直径1 mm花崗岩粒若干含む)

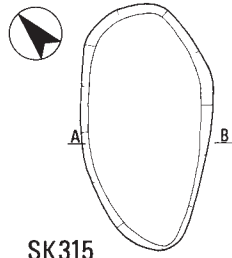


SK314



(層名)

- 1: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径1 cm小砂利若干・直径2 mm花崗岩粒若干含む)

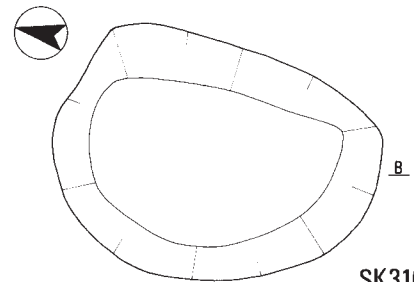


SK315

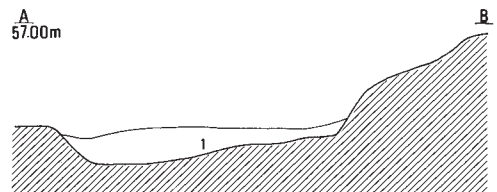


(層名)

- 1: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径1 cm小砂利若干・直径2 mm花崗岩粒若干含む)



SK316



(層名)

- 1: 10YR 5/6 暗黄褐色土 (直径3 cm小砂利多く・直径1 mm花崗岩粒若干含む)



第27図 S K 305・309・310・311・313・314・315・316実測図 (1:20)

るやかに折れ曲がる。図示できたのはこの2点であるが、出土状況から考えると、平底の34と同一個体の可能性がある。

土師器高杯 (35) 脚部の破片であり、全体は不明であるが、大きく裾部がひらくであろう。

土師器小型壺 (36・37) とともにやや扁平な球形の体部で、平底の底部である。

石鏃 (38・39) 材質は、サヌカイトである。

白玉 (40) 滑石製で、断面の形状は扁平な六角形状を呈する。 (服部芳人)

イ 古墳 (S X 201)

S X 201 (第25図) 削平された古墳の周溝である。古墳の東半分は東名阪自動車道によって削平されており、また周溝北西隅のコーナーが丸みを帯びるが、一辺約5.8 mの方墳と思われる。周溝の断面形は浅いU字形であり、内法部分の立ち上がりはややきつい。主体部はすでに削平されたものと思われ、検出できなかった。

北側周溝の中央やや南寄りから、完形の須恵器杯身1点が出土した。検出面と同じレベルで、かなり浮いた状態での出土である。

出土遺物 (第35図)

須恵器杯身 (41) 口径が9.7 cmと小ぶりで浅く、底部中央が突出する。TK 217 並行期^②に比定される。

(原田恵理子)

ウ 土坑 (S K 105・106・107・108・301・305・306・309・310・311・312・313・314・315・316・317・318・320・321・402)

S K 105・106・107・108 (第22図) S H 103のの西側、平坦面の縁辺で検出した。根攪乱が周辺にあり、また平面検出では、各遺構が別個のものかどうか定かではなかったが、断面観察により別遺構と判断した。なお、出土遺物はなく、性格は不明であるが、炭化物や焼土をそれぞれに含む。

S K 301 (第27図) S H 302の南東で検出した土坑墓である。西側部分が、掘立柱建物の柱穴とS K 306によって切られているため一見隅丸長方形に見えるが、径1 mの円形プランである。埋土上層から完形の小型丸底壺が伏せた状態で1点出土した。

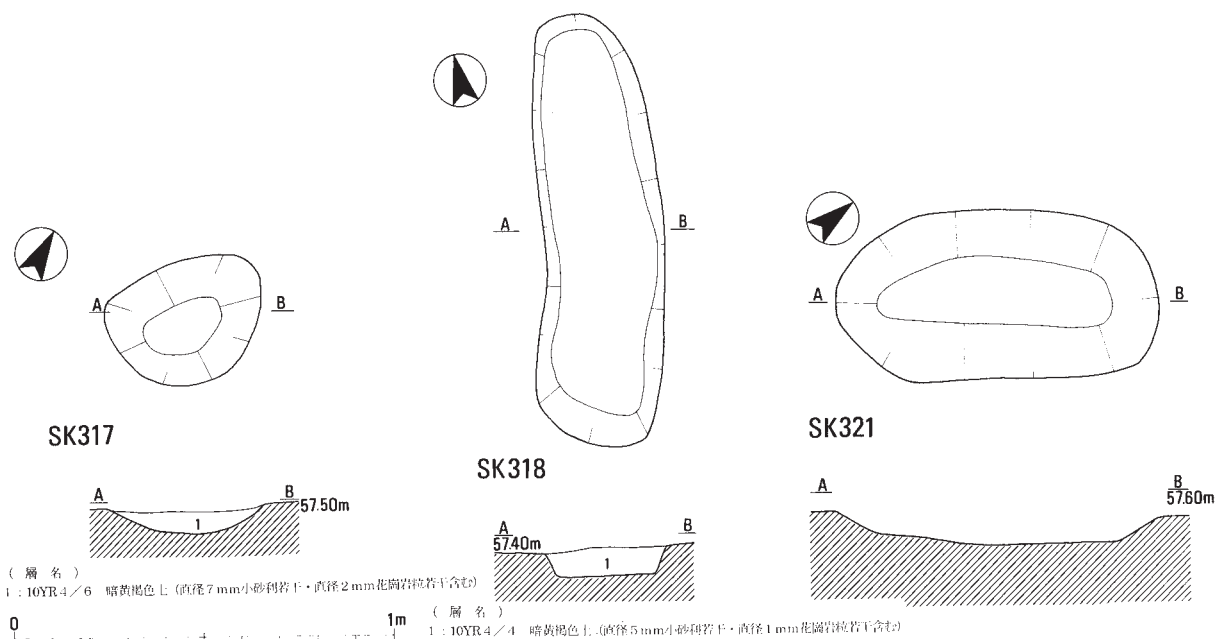
出土遺物 (第35図)

土師器小型丸底壺 (42) 直線的な口縁に、球形の体部、丸底の壺である。口径と体部最大径は、ほぼ等しい。

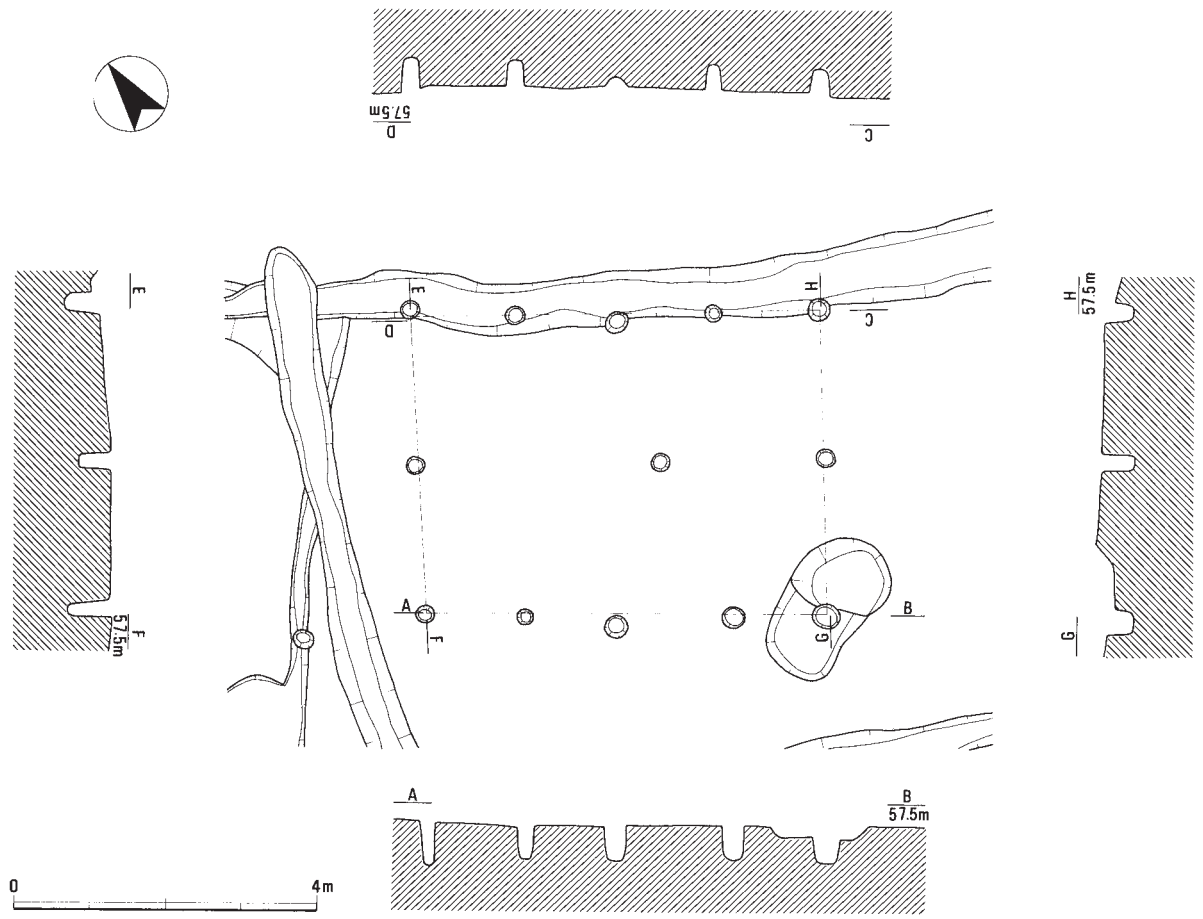
S K 312 (第28図) 調査区の西側で検出した土坑墓である。長辺1.9m、短辺0.8mの規模で、南北方向の隅丸長方形のプランである。残存の深さは、約0.2mである。遺構内の北側で、底から浮いた状態であるが、鉄製の刀子が1点出土した。

出土遺物 (第35図)

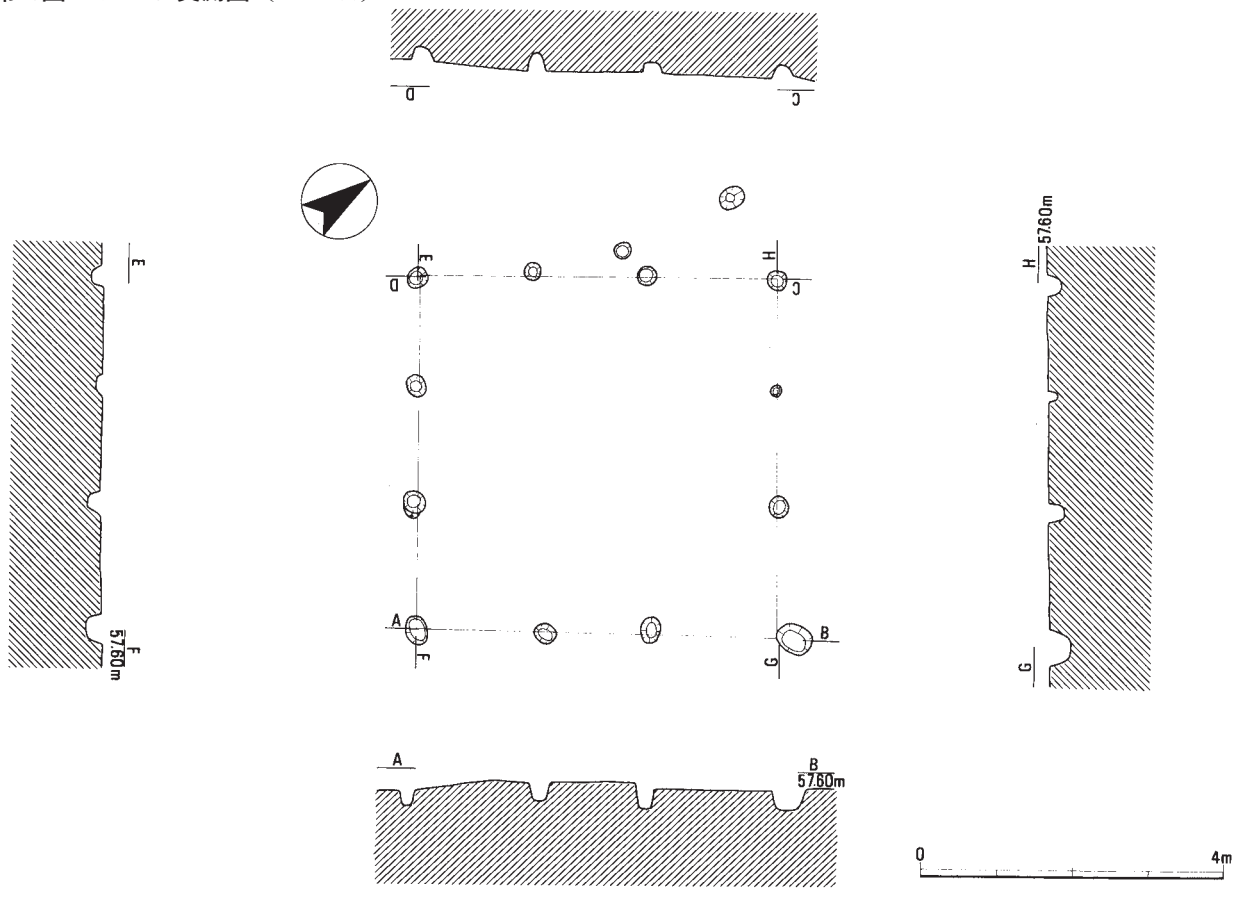
鉄製刀子 (43) 破片で全体像は不明であるが、断



第28図 S K 317・318・321実測図 (1 : 20)



第29図 S B 307実測図 (1 : 100)



第30図 S B 308実測図 (1 : 100)

面の形状が片刃を呈することから、刀子と判断した。

S K 402 調査区中央の斜面上部で検出した一辺約2mの不整形の土坑である。底面は2段に検出され、埋土には周辺の地山と考えられる黄褐色の粘土ブロックやこぶし大の礫が混入しており、自然の落ち込みの可能性もある。検出時に須恵器の蓋片が出土したにとどまる。

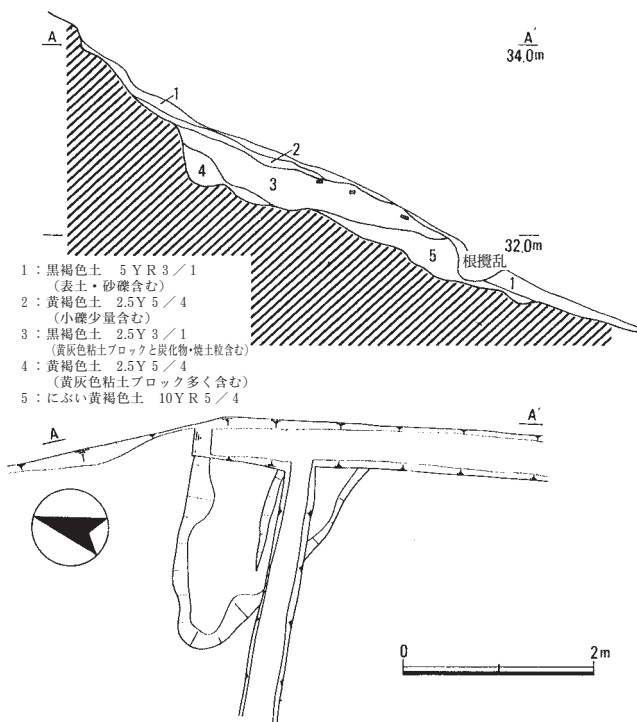
(4) 白鳳～天平時代

瓦窯の灰原 (S K 403)

S K 403 (第33図) 調査区南側の東壁で検出した2m×1.5mの規模の遺構である。埋土は褐色土であるが、炭化物や焼土ブロックが含まれ、白鳳から天平時代の平瓦10数片と須恵器片が出土した。遺構の位置する場所は丘陵裾部分であり、埋土や出土遺物などから瓦窯の灰原の一部と判断した。調査区外の東側にまだこの灰原は広がるものと思われるが、窯跡本体は、その北側上部に等高線に直交する形で若干窪んだ部分があり、この部分に存在している可能性が考えられる。

出土遺物 (第36図)

平瓦 (44～54) いずれも凸面には、縄目の叩きを施す。凹面には、ケズリを施すもの (44～51) と布目の痕跡を残すもの (52～54) がある。



第31図 S K 403実測図 (1 : 80)

須恵器椀 (55) 焼成不良のためか、色調は赤っぽく、一見土師器に見えるが、ロクロで成形される。口縁端が欠損し不明であるが、若干外反するようである。

(5) 時期不明

掘立柱建物 (S B 307・308・319)

S B 307 (第31図) S H 302の南東で検出した。2間×4間の掘立柱建物である。桁行はあと2間分南東側に延びる可能性もある。柱穴からの出土遺物はない。

S B 308 (第32図) S H 307の西側、西地区①の調査区の中央南側で検出した。3間×3間の掘立柱建物である。柱穴からの出土遺物はない。

S B 319 S H 308の南東で検出した。4間×4間の掘立柱建物であるが、柱通りが悪い。柱穴からの出土遺物はない。

包含層・検出中など出土遺物 (第36図)

鉛玉 (56) 北地区②の遺構検出中に出土した。直径1.4cm、重さ11.87gである。表面は、鉛特有の白色の錆で覆われる^③。

瑪瑙片 (57) 重さ3.907g、長さ2.4cmである。

鉄製品刀子 (58) 断面の形状が片刃を呈する。

土師器台付甕 (59～61) いずれも、S字口縁甕の脚部で「ハ」の字状に開く。

須恵器高杯 (62) 脚部の裾が大きく開き、端部は下方にやや突出させる。

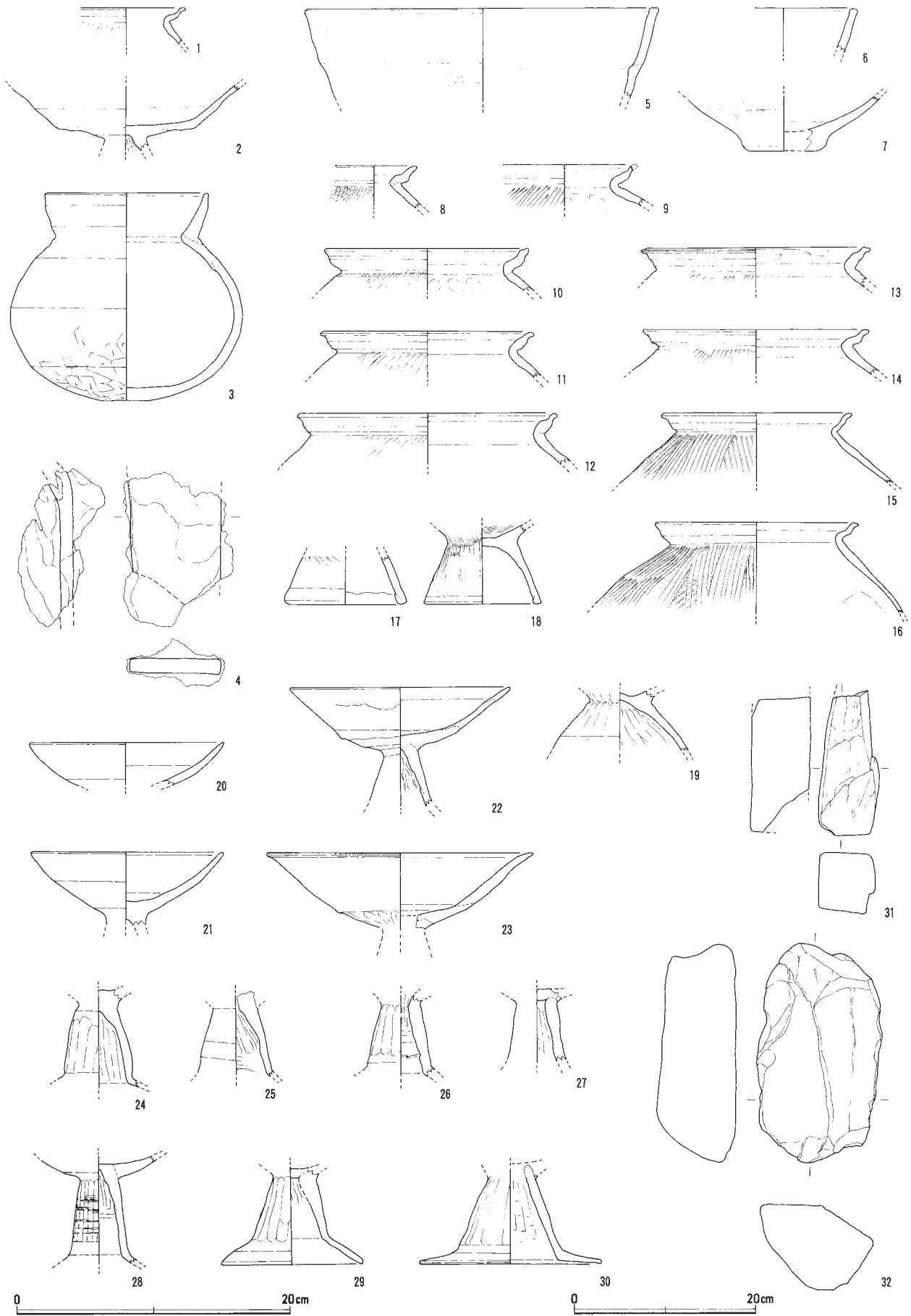
須恵器杯蓋 (63) 天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、端部は丸くおさめる。

須恵器椀 (64) やや扁平な体部の椀であろう。

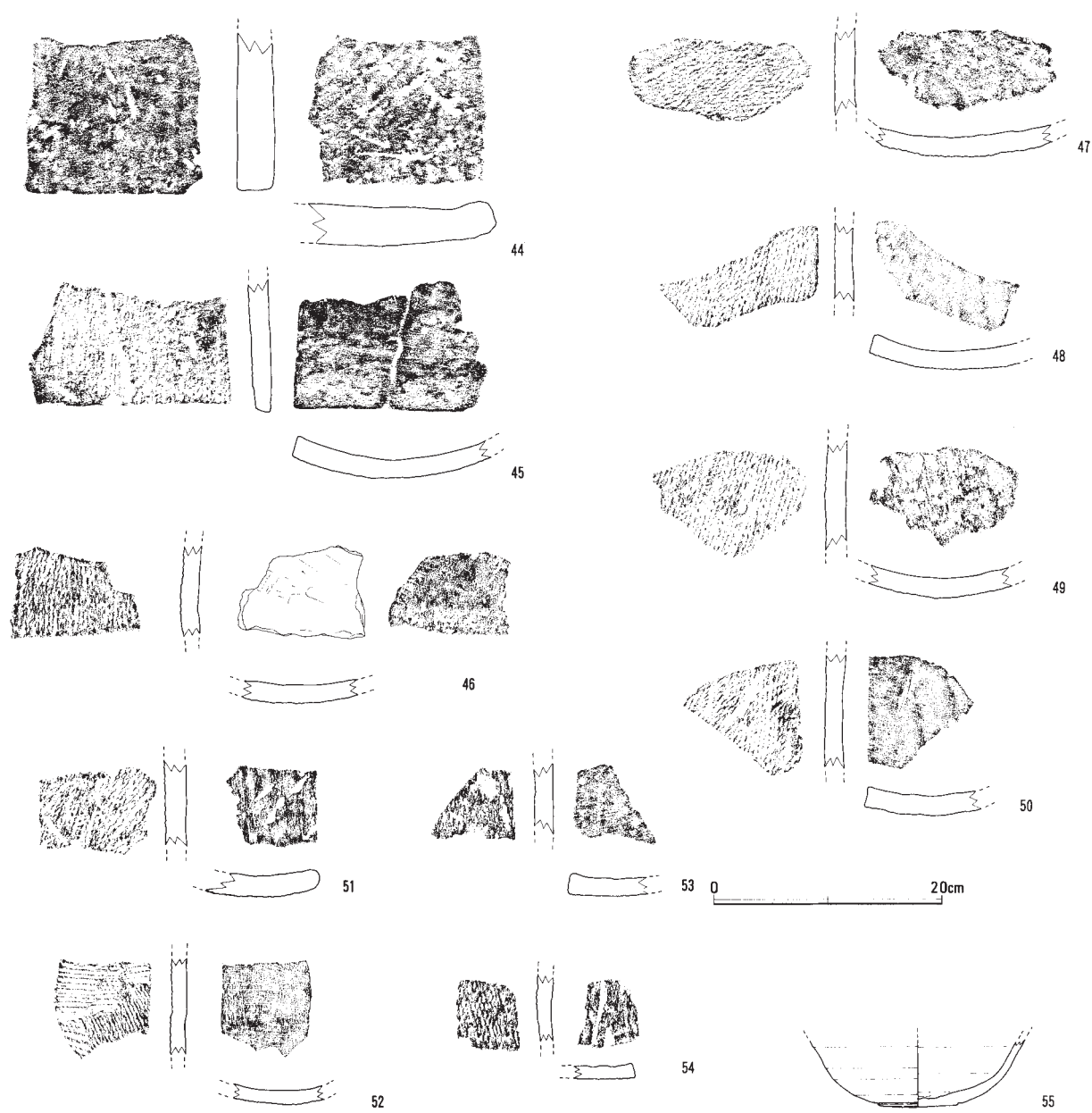
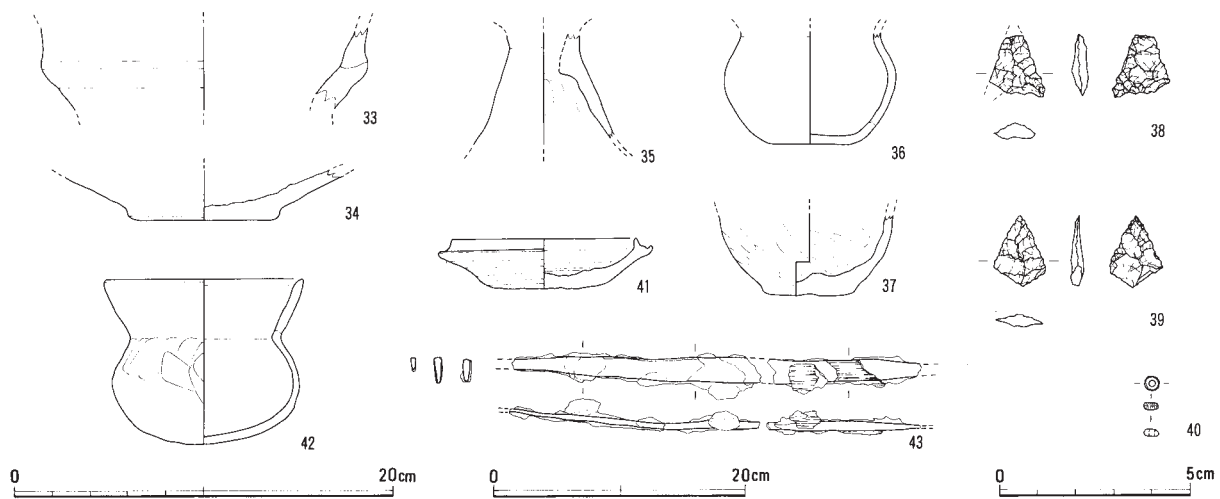
(服部芳人)

(註)

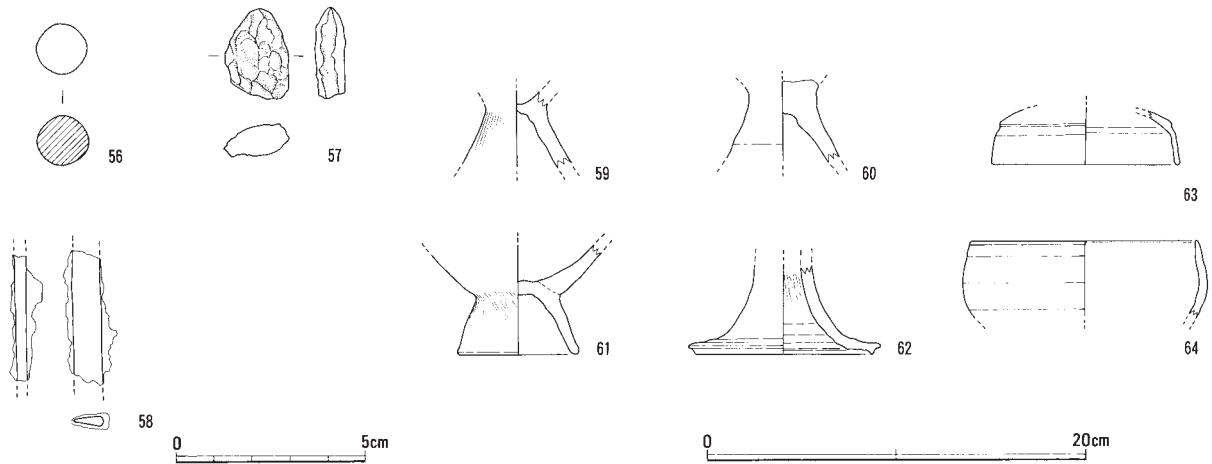
- ① 赤塚次郎「V考察」(『廻間式土器』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990)
- ② 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981)
- ③ 菰野町力尾城跡でも同様の大きさ・重さの鉛玉が出土している。戦国時代の火縄銃の玉にしては小さすぎることから、近世の産物であろうとされている。本例もおそらく近世の可能性が考えられる。片岡博「8. 江州国友鉄砲鍛冶と力尾城の関係」『力尾城跡 発掘調査報告—三重郡菰野町菰野—』(三重県埋蔵文化財センター2001.3)



第32図 S H101・102・103・104出土遺物実測図 (1 : 4・1 : 6)



第33図 S H302・S X201・S K301・312・S K403出土遺物実測図 (1:2・1:4・1:6)



第34図 包含層・検出時・表採遺物実測図（1：2・1：4）

IV 結 語

当遺跡の発掘調査は、平成11年度から13年度の3ヶ年に調査地区7ヶ所を設定して行い、合計面積は10,000㎡以上を越した。通称、重地山の半分程度を調査したことになる^①。銅鐸の出土した遺跡ということもあり、丘陵頂部の平坦面に限らず、斜面部分も調査の対象としたが、結果的には現在までのところ、直接銅鐸に関係する遺構・遺物は確認されなかった。しかしながら、古墳時代前期の集落、白鳳から天平時代の瓦窯の灰原という新たな発見があった。そこで、銅鐸、古墳時代の集落、瓦窯の3点について、思いつくことをいくつか述べてまとめとする。

1. 伊坂銅鐸について

伊坂銅鐸は、重地山から文久2年（1862）年、出土したことは周知のとおりである。この重地山と呼ばれる山は、北西から東南方向に延びる丘陵の先端部分であるが、団地造成に伴って寸断され、現況は、一見すると独立丘陵に見える。この山の東端は、さらに南北に走る東名阪自動車道によって分断されている。また、地元の聞き取りによると、いわゆる重地山と呼ばれる場所（範囲）は、南側から大きく入り込んだ谷地形より東側部分を通称しているという（第2図）。

ところで、この銅鐸は地元の農夫が、薪を拾いにこの山に入った際に発見されたということが、菟上

神社に所蔵され、銅鐸を収納していた木箱に記されていたという^②。通常、薪を拾うという行為では、せいぜい枝木の伐採に使う何らかの小道具ぐらゐは持って山に分け入るかと思われるが、土を掘り起こすということは行わないと考える。にもかかわらず発見されたということは、腐植土直下にその銅鐸が埋まっていたと考えるのが妥当なのであろうか^③。

また、銅鐸そのものが埋納、または発見される場所は、稀に平野部の見晴らしの良い所もあるが、弥生時代の集落遺跡と関わる平野に近い山岳の内部や、やや奥まった傾斜面に多いと言われている。稀に、丘陵の頂部平坦面から若干下った場所もあるとのことである。

今となっては、文久2年に発見された銅鐸出土地点の詳細は、不明と言わざるを得ないが、上記のような出土例から判断して、現在のところでは、西地区^①の西側の谷部分のどこかか、あるいは、現在東名阪自動車道が走っている部分のどこかであった可能性を考えるのが自然であろうか。

なお、発掘調査で弥生時代の土坑が、東地区と西地区の平坦面という、重地山の南東よりに偏っていることも、上記場所の可能性の傍証になろうか。

また、三重県内ではこの伊坂銅鐸より北での銅鐸の発見は、今のところない（第2表）。その上でのことであるが、この重地山からは、北側の桑名丘陵が

一望できることは、調査中特に実感してきたことである。また、この桑名丘陵には、朝日丘陵と比べ、様々な開発に伴って消失した可能性は否めないが、弥生時代の遺跡の数は少ないと言わざるを得ない。

これらの事実とともに、この重地山の位置は、巨視的にみて朝明川の流れる東西方向と、多度への谷筋（古代東海道の想定ルート）の南北方向のちょうど交差する場所でもあることに興味をそそられる。

現在、ジュウジヤマのジュウジは、漢字としては、「重地」を使用している。しかし、明治時代の地籍図には、「十治」の漢字を充てており、まさに東西と南北、縦と横を治める場所を意味するものと考え、非常に興味深い。というよりは、「ジュウジ」という訓読みの意味する点が、重要なかもしれない。

伊坂銅鐸と東側の谷を挟んで存在する、同時期の菟上遺跡との関連性は十分に考えられることではあるが、もう少し視野を広げた観点から、この伊坂銅鐸の性格を考えることも必要であるのかもしれない。

なお、第二名神高速道の建設が四日市JCTを超えて、西へ計画された場合、当遺跡内ではさらに丘陵の平坦面の中央部分や斜面部分が、調査の対象となる。その際には、新たな発見があり銅鐸の謎の解明がなされる可能性のあることを最後に記しておく。

2. 古墳時代の集落について

北地区①で検出したSH103についてである。この竪穴住居は、丘陵上にあるにもかかわらず残存が良く、壁柱穴・排水溝・入口施設？の存在も確認した。特に壁柱穴の残存状況（排水溝を挟む2辺に4ヶ所、他の2辺に3ヶ所存在する）ことや、排水溝側の支柱穴を挟んで対称的に存在する2個の柱穴などから、建物の復元が可能なのであろうが、浅学故に深く追求することは出来ない。しかしながら、建物の上部構造を考える上で、良好な資料を提供してくれていることに間違いはないであろう。

さらに、規模が一辺7.7 mと比較的大きいこと、炉跡や貯蔵穴がなく生活感があまり感じられないこと、集落の最西端に位置することなどから、何らかの特異な性格の住居である可能性も考えられそうである。

次に、今回、古墳時代前期の集落構造が若干推察できたことも成果のひとつである。

重地山の頂部は平坦な地形をしている。その東側部分については、東名阪自動車道によって掘削されているため不明であるが、東西に約130m、南北に約50m、面積にして約6,500㎡の範囲が平坦である。

平成11年度の調査区（北地区①）、平坦面の北側部分で竪穴住居が4棟（SH101・102・103・104）確認されており、平成12年度の調査区（西地区①）、平坦面の南東側部分でも同時期の住居（SH302）が1棟検出された。この2つの調査区の間は、調査が行われていないため、詳細は不明と言わざるを得ないが、竪穴住居が数棟存在している可能性は十分に考えられる（第35図）。

さらに、この時期の墓と思われる土坑墓が数基、平成12年度の調査区（西地区①）の南側から西側にかけてまとまって検出された。

平坦面の中央部分は、不明であるが、上記の竪穴住居群は、平坦面の北東側縁辺部分に存在し、土坑墓群は南西側縁辺部分に存在しているように推察できる。いずれも平坦面の縁辺部分であり、中央部分には空地でもあるのかもしれない。

いずれにしても、古墳時代前期の集落調査例は、これまで北勢地方では数少なく、貴重な成果が得られたことになる。

3. 瓦窯の灰原について

東地区①の南側斜面の裾部で検出された瓦窯の灰原SK403である。検出した位置は、丘陵斜面の裾部分で、何らかの建物の一部であるとは考えにくく、瓦窯の灰原と判断した。なお、出土した平瓦から考えて、白鳳から天平時代のものと思われる。

さらに、土層断面(第31図)を観察してみると、第5層の上面が平坦であり、この層自体は粘性でありあまりしまりがない土ではあるが、この層より上面の3層から瓦が出土していること、上記のように平坦でテラス状を呈していることから考えて、灰原ではあるが、作業を行う場の一部である可能性も考えられようか。

ところで、瓦窯としたためにその供給地を求めなければならない。考えられるのは寺院であるが、こ

の時期の近隣のものとしては、朝日町の縄生廃寺、桑名市の額田廃寺、四日市市の西ヶ谷遺跡の存在が現在知られている。

まず、縄生廃寺は当遺跡と同じ朝日丘陵の東端に位置し、朝明川を利用すれば、3 km程度の距離であるが当遺跡から運べなくもない。

次に、額田廃寺は北方向へ同じく3 km程度の距離であるが、員弁川を越えなければならないし、郡の違い（伊坂遺跡は朝明郡、額田廃寺は桑名郡）もある。

さらに、西ヶ谷遺跡は当遺跡の南約4 kmと上記2遺跡よりも遠く、これも郡の違い（西ヶ谷遺跡は三重郡）と若干時期の相違もありそうである。

そこで、実際に3遺跡から出土した瓦との比較を行った^⑤。まず、縄生廃寺である。出土した平瓦には3種類ある^⑥が、縄目、叩きの大きさ、厚さなどいずれも一見して類似するものは見られない。また、額田廃寺出土の平瓦とは縄生廃寺と比べると類似しているようだが、当遺跡例の胎土に金雲母が含まれること、縄目叩きも類似しているが、布目が当遺跡例の方が細かいなど、やはり違いの方が目立つ。西ヶ谷遺跡出土の平瓦については、8世紀後葉に比定されており^⑦、当遺跡と時期的に合わない可能性がある。

結論としては、上記3遺跡のどれもその供給地としては考えることはできそうになく、現時点では、未発見の寺院か、もしくは、西ヶ谷遺跡で想定されるような仏堂などの存在を仮定することとする。今後さらに遺物の詳細な比較検討を行うとともに、周辺の調査によってその実態は、判明していくものと思われる。

（服部芳人）

（註）

- ① 重地山と呼ばれる山の範囲は、東西約180m×南北約180mである。なお、遺跡の所在する小字名は、伊坂町字重地ではなく字鍔谷（あぶみだに）である。
- ② 菟上神社で保管されていた時の箱には、銅鐸の他に勾玉1、管玉18、水晶玉152、碧瑠璃玉48も入っていた。水晶玉、碧瑠璃玉は、後世のものとされるが、勾玉と管玉については、周辺に古墳などが存在する可能性も考えられる。『三重考古図録』（三重県教育委員会）1954・服部貞蔵他『四日市市史第二巻史料編考古Ⅰ』（四日市市）1988
- ③ 近年、静岡県周智郡森町で発見された銅鐸も、調査担当者から当時の様子を確認したところ、過去に発見された銅鐸の場所を探すために、電探作業を行おうと腐植土を除去したところ鱗の部分が顔を出したと言うことである（静岡県田村隆太郎氏の御教示による）
- ④ 八郷地区市民センターにて、閲覧
- ⑤ 縄生廃寺出土瓦は、朝日町教育委員会浅川充弘氏、額田廃寺出土瓦は、桑名市教育委員会齋藤 理氏・平野亜紀氏、西ヶ谷遺跡出土瓦は、四日市市教育委員会清水政宏氏のご配慮で、実見させていただいた。
- ⑥ 早川裕巳『縄生廃寺跡発掘調査報告』（朝日町教育委員会）1988
- ⑦ 清水政宏『西ヶ谷遺跡4』（四日市市教育委員会）2002

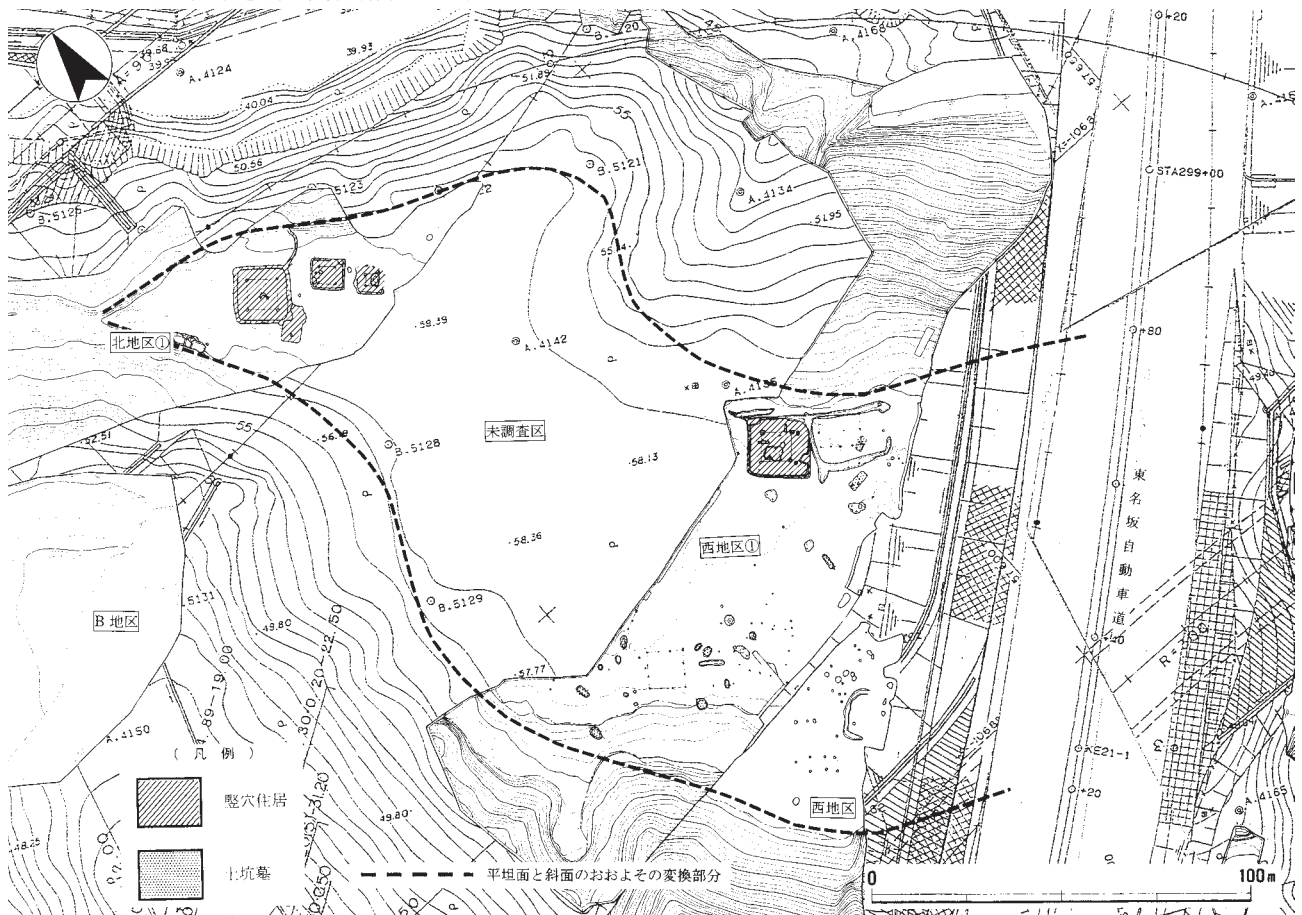
No.	出土地(遺跡名)	出土年	形式・文様	高さ(cm)	所蔵・保管	備考
1	四日市市伊坂町字鑓谷(伊坂遺跡)	文久2年(1862)	扁平鈕・6区袈裟襷文	40.3	菟上神社所蔵・四日市市立博物館保管	通称、重地山
2	四日市市山村町字池ノ谷(金塚遺跡)	平成10年(1999)	扁平鈕	-	三重県埋蔵文化財センター	鈕破片
3	四日市市大矢知町青木山	享保・元文年間(1736~40)	不明	不明	現存せず	『勢陽五鈴遺響』に宝鐸とある
4	四日市市大矢知町青木山	享保・元文年間(1736~40)	不明	不明	現存せず	『勢陽五鈴遺響』に宝鐸とある
5	鈴鹿市磯山町字黒丸・旧河芸郡栄村磯山	明治12年(1879)	外縁付鈕2式・4区袈裟襷文	39.3	東京国立博物館	絵画(鹿・猪・魚・龍あり)
6	鈴鹿市高岡町字東ノ岡(東ノ岡遺跡)	昭和52年(1977)	稜環鈕2式・横帯文	-	岡田登	身鏝下端部片
7	鈴鹿市上野町字巻反通(一反通遺跡)	平成元年(1989)	突線鈕・近畿	-	鈴鹿市教育委員会	鏝下端部片
8	津市野田・旧安濃郡神戸村	宝暦年間(1751~63)	突線鈕・三遠・横帯文	64.5	専修寺	
9	津市神戸字木ノ根・旧安濃郡神戸村	大正6年(1917)	外縁付鈕2式・2区流水文	39	東京国立博物館	絵画(蛙あり)・播磨・河内・大和と同范鐸あり
10	津市高茶屋小森町字四ツ野(四ツ野遺跡)	昭和61年(1986)	突線鈕4・近畿III	66.5	津市教育委員会	
11	津市高茶屋小森町字四ツ野(四ツ野遺跡)	昭和61年(1986)	突線鈕・近畿	-	津市教育委員会	27点の破片・10と共伴
12	津市高茶屋小森町字四ツ野(四ツ野遺跡)				文化庁	
13	津市高茶屋小森町字四ツ野(四ツ野遺跡)				個人	
14	一志郡白山町川口字風呂谷・旧一志郡川口村	文政8年(1825)	扁平鈕・6区袈裟襷文	(43.1)	現存せず	
15	多気郡多気町四疋田	昭和19年(1944)	不明・流水文?	50前後	不明	
16	伝伊勢国出土	不明	突線鈕4・近畿II A	現90.8	天理参考館	
17	名張市黒田・旧名賀郡錦生村	平安末	不明	(90)	現存せず	『寛禪抄』註記
18	上野市比土高瀬字東賀柳・旧伊賀郡比土村	文久3年(1863)	突線鈕4・近畿III A	124	埼玉県立博物館	
19	名賀郡青山町柏尾字湯舟・旧名賀郡阿保村柏尾	大正7年(1918)	突線鈕4・近畿III C	106.7	東京国立博物館	
20	上野市中友生字西場谷(西場谷C遺跡)	平成元年(1989)	突線鈕・近畿	-	上野市教育委員会	鏝破片(4.6×2.6×3.0cm)
21	伝伊賀国出土・上野市千歳・旧阿山郡府中村	不明	突線鈕・近畿	-	京都大学	飾耳片

第2表 三重県内の銅鐸出土地一覧表

(岡田登「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片」『考古学雑誌』第75巻 第4号(日本考古学会・1990)収録 第4表「三重県下出土銅鐸一覧」に、以下の文献を参考にして加筆)

【参考文献】

- ・『一反通遺跡』『鈴鹿市埋蔵文化財だより2』(鈴鹿市教育委員会・1989)
- ・『三重県埋蔵文化財年報19』(三重県教育委員会・1989.3)
- ・伊藤久嗣「三重県における弥生時代の諸問題」『三重考古』第2号(1978)
- ・伊東富太郎「伊勢国三重郡八郷村伊坂発見の銅鐸に就て」『考古学雑誌』第二十巻 第四號(1930)
- ・『上野市新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書-第3分冊-』1994.3上野市遺跡調査会
- ・岡田登「三重県鈴鹿市高岡山遺跡群発見の銅鐸片」『考古学雑誌』第75巻 第4号(日本考古学会・1990)
- ・服部芳人他「金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告」(三重県埋蔵文化財センター・2002.3)
- ・村木一弥「津市四ツ野B遺跡の発掘調査」『三重の古文化』74(三重郷土会・1995)
- ・服部貞蔵他「四日市市史 第二巻 資料編 考古1」(四日市市・1988)
- ・『高宮郷の考古学』(鈴鹿市教育委員会・1996)
- ・『三重考古図録』(三重県教育委員会・1954)
- ・『磯山銅鐸の時代』(鈴鹿市考古博物館・2003.10)



第35図 遺構配置図(1:1,000)

遺構名	地区	規模(m)			面積(㎡)	主柱穴(m)			周溝	炉	貯蔵穴	壁柱穴	主な出土遺物	主軸	備考
		東西	南北	深さ		形状	径	深さ							
SH101	北地区(B-P13)	3.6	3.7	0.1 ~ 0.2	13.32	円形	0.3 ~ 0.4	0.15	幅0.1m・北西と南西のみ検出	なし	なし	なし	土師器S字口縁壺(C類)・高杯	N45°E	検出中、上面に焼土・炭化物痕跡・床面西側中央に硬化面(範囲0.3m)
SH102	北地区(B-012)	4.5	4.3	0.1	19.35	円形	0.3	0.4	幅0.1m・深さ0.2m	中央西側・東西0.7m・南北0.5m	北東隅・円形直径0.85m・深さ0.2m	なし	土師器高杯・壺・甕・鉄鎌	N43°E	
SH103	北地区(B-L11~M12)	7.7	7.7	0.35	59.29	円形	0.4	0.6	全周	なし	なし	北東・南東に4個・北西・南西に3個	土師器S字口縁壺(D類)・高杯・壺・メノウ原石	N49°E	南東隅がSH104に切られる・北東隅から排水溝(幅0.3m・長さ6m)・南東部に浅い土坑(入口?)
SH104	北地区(B-M13)	2.6	2.6	0.1 ~ 0.15	6.76	なし	-	-	なし	なし	なし	なし	土師器S字口縁壺(C類)・砥石	N42°E	検出中、焼土・炭化物痕跡
SH302	西地区①(B-24V~25W・E-1V~1W)	8	8	0.35	64	円形	0.5	0.3 ~ 0.4	全周	中央に硬化面	北西隅に土師器壺集中	南東溝中央に1個	土師器壺・高杯・壺・小玉・石鏝(サヌカイト・チャート)	N42°E	焼失家屋・間仕切り溝2条・北隅から排水溝(幅0.3m・長さ2.5m)

第3表 竪穴住居規模一覧表

遺構名	地区	規模(m)	深さ(m)	時期	出土遺物	備考
SK1	東地区	2.7	2.2	0.4	弥生時代後期	高杯脚部
SK105	北地区①	1.4	1.5	0.25	古墳時代	なし
SK106	北地区①	0.7	0.7	0.2	古墳時代	なし
SK107	北地区①	1.0	0.7	0.17	古墳時代	なし
SK108	北地区①	1.0	0.9	0.38	古墳時代	なし
SK109	北地区③B-C4	0.95	0.82	1.4	縄文時代	なし
SK110	北地区③A-Y5	1.2	1.2	1.4	縄文時代	なし
SK111	北地区③A-X5	1.14	1.26	1.34	縄文時代	なし
SK202	西地区(下層)E-S8	1.4	1.2	0.15	弥生時代	焼土ブロック混入
SK203	西地区(下層)E-S8	0.6	0.7	0.1	弥生時代	焼土ブロック混入
SK301	西地区①E-2Y	1.1	1.1	0.3	古墳時代前期	土師器小型丸底壺
SK305	西地区①E-3X	1.4	0.55	0.2	古墳時代	なし
SK306	西地区①E-2X	0.9	1.1	0.1	古墳時代	なし
SK309	西地区①E-4P	1.5	0.9	0.2	古墳時代	なし
SK310	西地区①E-50	1.5	1.3	0.4	古墳時代	なし
SK311	西地区①E-3M	0.7	0.6	0.2	古墳時代	なし
SK312	西地区①E-2L・3L	0.75	1.9	0.25	古墳時代	鉄製刀子
SK313	西地区①E-2N	1.2	0.85	0.2	古墳時代	なし
SK314	西地区①E-5R	1.05	0.85	0.15	古墳時代	なし
SK315	西地区①E-5P	1.3	0.7	0.1	古墳時代	なし
SK316	西地区①E-4L	1.7	1.3	0.5	古墳時代	なし
SK317	西地区①E-2M	0.85	0.65	0.2	古墳時代	なし
SK318	西地区①E-4U	2.3	0.65	0.15	古墳時代	なし
SK320	西地区①E-4Q・4R	1.5	1.2	0.9	縄文時代	なし
SK321	西地区①E-2N	1.7	0.9	0.2	古墳時代	なし

第4表 土坑規模一覧表

遺構名	地区名	規模			棟方向	面積(㎡)	備考
		間数	桁行(m)	梁行(m)			
SB307	西地区①E-1X~E-2Y	2間×4間	5.3	4.0	N36°W	21.2	
SB308	西地区①E-3O~E-4O	3間×3間	4.7	4.7	N35°W	22.09	
SB319	西地区①E-5Q~E-5S	4間×4間	5.2~ 6.4	5.5~ 7.0	N42°W	28.6 ~ 44.8	柱間不揃い

第5表 掘立柱建物規模一覧表

V 三重県伊坂遺跡から出土した炭化種子について

札幌国際大学 博物館 椿坂恭代 (つばきさか やすよ)

宮塚文化財研究所 宮塚義人 (みやつか よしと)

1、遺跡の所在と性格

遺跡の名称：伊坂遺跡

発掘調査機関：三重県埋蔵文化財センター

発掘調査面積：12,624m²

発掘調査期間：1999年7月5日～2002年1月9日

発掘調査担当者：服部芳人

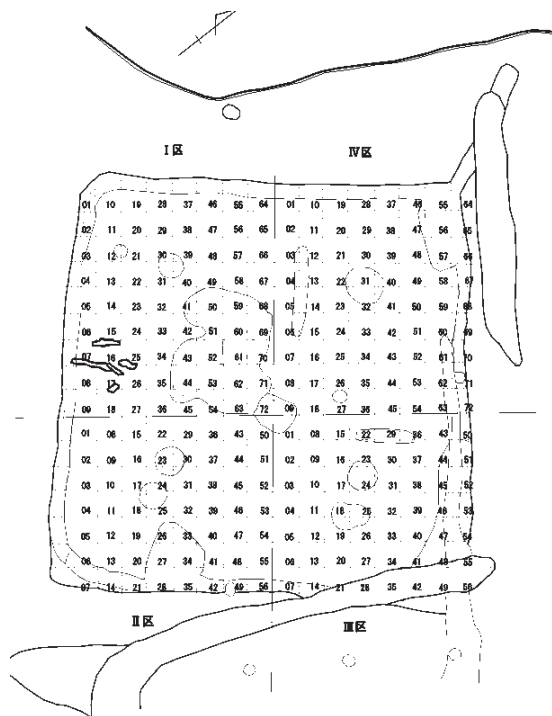
遺跡の時期：古墳時代前期

遺跡の立地：標高約60mの丘陵上の平坦面。

北緯35° 02' 06" 東経136° 37' 52"

2、扱った資料

分析資料として扱った炭化種子は、古墳時代前期に存在したであろうSH302の床面部分を4分割し、さらに50cm間隔の小グリッドを設定して、土壌を採取した(第36図参照)。採取された土壌は一定期間乾燥させた後、0.425mmのふるい目を使用し、フローテーション法で処理後、浮遊遺物として分離した。資料は実体顕微鏡下で分類し、観察と撮影を行った。検出された植物種子の出土グリッド、層序、検出数は第6表に示しておく。



第36図 土壌サンプル採取地点

3、検出された炭化種子

イネ *Oryza sativa* L.(写真1 1a,b,c,2a,b,c,3a,b,c)

住居跡の床面から2粒と破片1点が検出された。果実はいずれも比熱の夜変形と破損して出土している。資料は長楕円形や短楕円形で腹面(図版写真1b,2bの下部)に胚の剥離した痕跡が観察される。側面にやや隆起した立ての稜線が2本ある。計測値は1a,b,c:長さ4.6mm、幅2.6mm、厚さ1.7mm 2a,b,c:長さ3.4mm、幅2.3mm、厚さ1.8mm 3a,b:破片のため計測していない。

コムギ? *Triticum aestivum* L.(写真1 1-4a,b,c)

同様に床面から1粒検出された。果実は短楕円系。腹面の中央鬼は縦溝があり、背面にはやや丸みがあり下部にはやや円形の胚がある。形態と大きさからはコムギの特徴を示すが被熱による変形が激しく正確な分類は困難である。計測値は長さ4.40mm、幅2.70mm、厚さ2.40mm。

ブナ科 FAGACEAE(写真1 1-5,6,7)

住居跡(SH302)の床面から未炭化の状態で表皮の破片と殻斗の部分が検出された。形態の特徴からはコナラ属 *Quercus*L.に分類できるが種までの分類は不可能である。

不明球果(写真1 1-8)

同じく住居跡の床面から球果が1つ検出されたが資料の保存状態が悪いため詳細の分類はできなかった。計測値は長さ5.80mm、幅4.90mm。

4、コメント

検出された植物種子は少量であるが栽培種子のイネ、コムギ?のほかに堅果類が検出された。三重県内の当該時期での栽培植物種子の検出は、これまでに数例報告があるが、さらに各地域の発掘調査で同様な調査に努めれば重要な資料を提供できるものと期待される。

- ① ・ 武田明正・塩谷 格「Ⅲ 納所遺跡の出土植物」(『納所遺跡』—その自然環境と自然遺物— 三重県教育委員会 1979.11)
 ・ 塩谷 格「Ⅳ大田遺跡の出土植物」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査報告 自然科学編Ⅰ』 三重県埋蔵文化財センター 1993.3) など

	遺構名	採取位置	時期	イネ		コムギ?	ブナ科	不明
				(粒)	(片)	(粒)	(数)	(粒)
	SH302	I-02	古墳時代前期	1				
	SH302	I-24	古墳時代前期		1			
	SH302	II-58	古墳時代前期	1				
	SH302	II-36	古墳時代前期				1	
	SH302	II-60	古墳時代前期				3	
	SH302	II-24	古墳時代前期					1
	SH302	III-62	古墳時代前期			1		
合計				2	1	1	4	1

第6表 伊坂遺跡炭化種子出土表

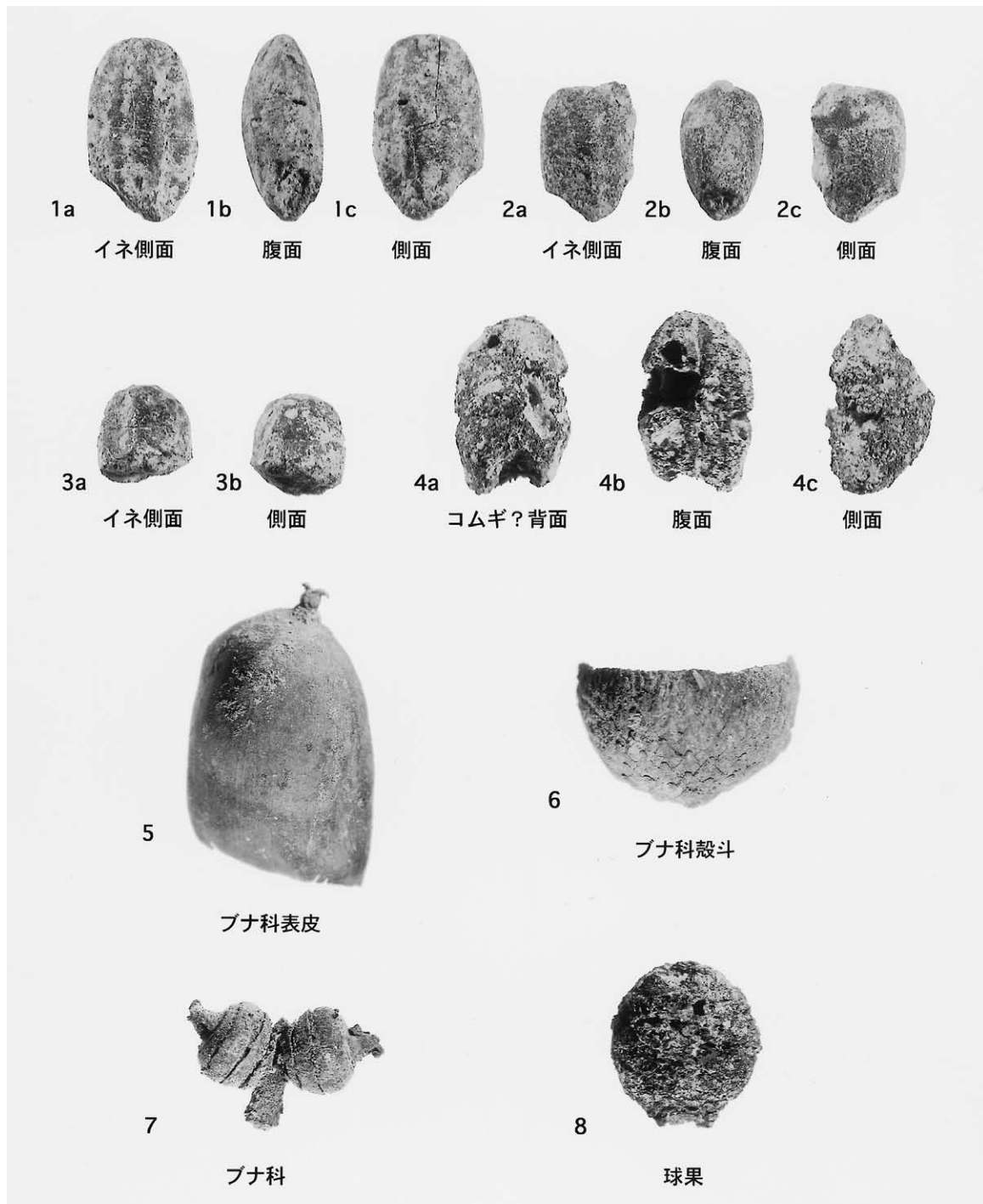


写真 1 SH302出土炭化種子

No.	登録番号	器種	地区名	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-05	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH101 Ⅲ区周溝	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・タテハケ(5 本/2cm)	密(〜0.1cm以下の砂粒微量に 含む)	良好	橙(5YR6/6)		
2	001-02	土師器 高杯	北地区 ①	SH102 Ⅰ区	-	-	-	内:摩滅著しく不明 外:脚部内面シボリ目痕跡	やや密(〜0.2cm大の砂粒含む)	良好	内:にぶい黄橙(10YR6/4) 外:明赤褐(5YR5/6)	頸部一部 残存	NO.2
3	001-01	土師器 直口壺	北地区 ①	SH102 Ⅲ区	11.2	15.2	体部 最大径 17.0	内:ヨコナデ・ナデ 外:ヨコナデ・下半不定方向 ケズリ	やや密(〜0.3cm大の砂粒含む)	不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 5/6	NO.5・ 底部外面 黒斑
4	019-02	鉄製品 鉄鎌	北地区 ①	SH102 Ⅲ区	(5.8)	(1.8)	-						
5	002-03	土師器 壺	北地区 ①	SH103	25.2	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・工具によるナ デ	密(〜0.1cm大砂粒微量に含む)	良好	内:明黄褐(10YR7/6) 外:にぶい赤褐(5YR5/4)	口縁部 1/2	NO.58・ 61
6	002-02	土師器 壺	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	密(〜0.1cm大砂粒微量に含む)	良好	橙(5YR6/6)		
7	006-05	土師器 壺	北地区 ①	SH103	5.0	-	-	内:ナデ(摩滅著しい) 外:ハケ・ナデ	やや密(〜0.4cm大の砂粒含む)	良好	外:橙(5YR6/6) 内:明黄褐(10YR7/6)	底部1/4	
8	005-02	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:ナデ・ヨコナデ 外:ヨコナデ・タテハケ	やや密(〜0.1cmの砂粒少し含 む)	良好	外:暗褐(7.5YR3/4) 内:明褐(7.5YR5/6)		NO.100
9	001-06	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:ヨコナデ・ユビオサエ 外:ヨコナデ・タテハケ(6 本/2cm)	粗(〜0.2cm大砂粒多く含む)	良好	明黄褐(10YR7/6)		
10	006-03	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	14.4	-	-	内:ヨコナデ・一部ユビオサ エ 外:タテハケ	やや密(〜0.4cm大の砂粒含む)	良好	外:10YR7/6明黄褐 内:10YR6/4にぶい黄橙	口縁1/4	
11	006-02	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	15.0	-	-	内:ヨコナデ 外:タテハケ	やや密(〜0.2cm大の砂粒・雲 母含む)	良好	外:7.5YR5/4にぶい褐 内:10YR7/6明黄褐	口縁1/6	
12	006-04	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	17.0	-	-	内:ヨコナデ 外:タテハケ(摩滅著しい)	密(〜0.4cm大砂粒多く含む)	良好	橙(7.5YR7/6)	頸部 1/12	
13	002-01	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	16.0	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・タテハケ (摩滅著しく不明)	やや粗(〜0.2cm大砂粒含む)	良好	明黄褐(10YR7/6)	頸部1/6	NO.63
14	006-01	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	16.0	-	-	内:ヨコナデ 外:タテハケ(5本/cm)	やや密(〜0.4cm砂粒含む)	良好	橙(7.5YR6/6)	口縁 1/12	
15	004-03	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	13.6	-	-	内:ヨコナデ 外:ハケ目	密(0.1〜0.2cmの白色・ 黒色砂粒全体に多く含む)	良好	淡黄褐色(2.5YR7/4)	口縁部 1/4	NO.77
16	004-01	土師器 S字 口縁甕	北地区 ①	SH103	14.6	-	-	内:ヨコナデ・ヘラナデ 外:ハケ目(8本/5mm) (6〜7本/2.2cm)	やや粗(〜0.2cmの小石を少量 含む)	良好	淡黄褐色(2.5Y7/4)	口縁部〜脚 上半2/3	NO.89・ 103・ 135
17	005-01	土師器 台付甕	北地区 ①	SH103	8.3	-	-	内:ナデ・ヨコナデ 外:ヨコナデ・ハケ目 (4本/cm)	やや粗(〜0.3cmの砂粒多く含 む)	良好	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:明黄褐10YR7/6	1/6	NO.108
18	003-03	土師器 台付甕	北地区 ①	SH103	7.9	-	-	内:ナデ・ヨコナデ 外:ハケ目(8本/5mm) の後、ハケ目(7本/2cm)	密(〜0.2cm大砂粒微量に含む)	良好	橙(7.5YR6/6)	5/12	NO.32
19	003-04	土師器 台付甕	北地区 ①	SH103	-	-	台部の くびれ部 径4.5cm	内:板状工具によるナデ 外:板状工具によるナデ (摩滅著しい)	やや粗(〜0.2cm大砂粒含む)	良好	橙(7.5YR6/6)		NO.29
20	001-04	土師器 高杯	北地区 ①	SH103 排水溝	14.0	-	-	内:ナデ(摩滅著しい) 外:ナデ(摩滅著しい)	やや密(〜0.4cm大の砂粒含む)	良好	橙(5YR6/8)	口縁部 1/12	NO.2
21	001-03	土師器 高杯	北地区 ①	SH103 排水溝	13.8	-	-	内:ナデ(摩滅著しい) 外:ナデ(摩滅著しい)	やや密(〜0.3cm大の砂粒含む)	良好	内:橙(7.5YR6/6) 外:橙(5YR6/8)	口縁部 5/8	NO.1
22	004-02	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	16.2	-	杯部高 4.55	内:ヨコナデ・シボリ目痕跡 外:ヨコナデ・工具によるナ デ	密(0.1cm前後の砂粒を多く含 む)	良好	淡黄褐(10YR8/4)〜橙(7. 5YR7/6)・一部褐灰(1 0YR4/1)	口縁部の一部 と脚部下位を 除き残存	NO.140
23	005-04	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	19.4	-	-	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ・ヘラケズリ	やや密(〜0.3cmの砂粒少し含 む)	良好	橙(7.5YR6/6)	杯部 7/12	NQ.77-1
24	002-05	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:シボリ目痕跡 外:タテ方向工具によるナデ・ ヨコナデ	密(〜0.1cm大砂粒微量に含む)	良好	橙(7.5YR6/6)	完存	NO.7
25	002-06	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:シボリ目痕跡 外:ヨコナデ(摩滅著しい)	密(〜0.6cm大砂粒微量に含む)	良好	にぶい黄橙(10YR7/4)	完存	NO.34
26	002-04	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:シボリ目痕跡 外:タテ方向工具によるナデ	密(〜0.2cm大砂粒微量に含む)	良好	橙(5YR6/6)	1/2	NO.60
27	003-01	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:シボリ目痕跡 外:ナデ(摩滅著しく不明)	やや密(〜0.2cm大砂粒含む)	良好	明黄褐(10YR7/6)		NO.25
28	006-06	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	-	-	-	内:ヨコナデ・シボリ後丁寧ナデ 外:ナデ・タテ方向粗いミガキ風の ナデ	密(〜0.1cm大砂粒微量含む)	良好	明黄褐(10YR7/6)		
29	006-07	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	10.2	-	-	内:摩滅著しく調整不明 外:板状工具によるナデ	やや粗(〜0.2cm大砂粒含む)	良好	明黄褐(10YR7/6)	脚部1/4	
30	005-03	土師器 高杯	北地区 ①	SH103	13.2	-	-	内:ナデ・シボリ後ナデ 外:ナデ・ヨコナデ	粗(〜0.5cm砂粒多く含む・0. 7cm小石含む)	良好	外:明褐(7.5YR5/6) 内:明赤褐(5YR5/6)		NQ.129-1
31	009-01	砥石	北地区 ①	B-M13 検出中	15.0	6.4	-						
32	008-01	砥石	北地区 ①	B-M13 検出中	23.8	13.4	-						
33	018-04	土師器 甕	西地区 ①	SH302 Ⅲ区	-	-	-	内:ヨコナデ・ナデ 外:ヨコナデ	粗(〜0.3cmの砂粒を含む)	不良	淡黄(2.5Y8/4)		

第7表 遺物観察表(1)

No.	登録番号	器種	地区名	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
34	018-02	土師器 甕	西地区 ①	SH302 Ⅲ区	6.6	-	-	内：摩擦著しく不明 外：摩擦著しく不明	粗（～0.7cm大の砂粒を多量に含む）	不良	内：明黄褐（10YR7/6） 外：浅黄橙（10YR8/4）		底部外面に 木葉痕
35	017-03	土師器 高杯	西地区 ①	SH302 Ⅲ区	-	-	残存 最大径 8.25	内：ヨコナデ・シボリ目痕跡 外：ミガキ	やや粗（～0.2cmの石英粒など 花崗岩粒を多く含む）	不良	内：褐灰（10YR4/1） 外：淡黄（2.5Y7/4）	脚部のみ 残存 （鋸部を欠く）	
36	017-02	土師器 小型 丸底壺	西地区 ①	SH302 Ⅱ区	-	-	体部 最大径 10.1	内：ナデ 外：ナデ・ヨコナデ	やや粗（～0.5cmの白色粒子を 含む）	不良	明黄褐（10YR7/6）・ 黒斑部褐灰（10YR4/1）	底部1/2	
37	007-02	土師器 手づくね	西地区 ①	E-U1	-	-	-	内：板ナデ 外：板ナデ・一方向ナデ	密（～0.1cm以下砂粒微量含む）	良好	にふい黄褐（10YR7/4）	底部完存	
38	018-06	石鏃	西地区 ①	SH302				0.773g					
39	018-05	石鏃	西地区 ①	SH302				0.626g					
40	018-07	白玉	西地区 ①	SH302				0.12g					
41	010-05	須恵器 杯身	西地区	SX201	9.7	2.7	最大径 11.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ヘラオコシ	密	良好	灰（5Y5/1）	完形	
42	017-01	土師器 小型 丸底壺	西地区 ①	SK301	10.4	8.6	体部 最大径 9.9	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ヘラ状工具に よるナデ・オサエ	やや粗（～0.1cmの金雲母を含 む）	不良	淡黄（2.5Y7/4）・ 黒斑部褐灰（10YR4/1）	ほぼ完形	口縁部に 黒斑
43	019-03	鉄製品 刀子?	西地区 ①	SK312									
44	012-02	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：摩擦著しく不明（ケズ リ?） 凸面：摩擦著しく不明	やや密（～0.3cm大砂粒含む・ 1.1cmの石1個）	不良	凹面：浅黄橙（10YR8/4） 凸面：にふい黄橙（10YR7/4）		
45	015-02	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：ケズリ 凸面：タタキ	～0.4cm大砂粒微量含む	不良	浅黄（2.5Y7/4）		
46	011-01	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：ケズリ 凸面：タタキ	やや密（～0.1cm大砂粒含む）	不良	凹面：にふい黄橙（10YR7/4） 凸面：浅黄（2.5Y7/3）		
47	011-02	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：ケズリ 凸面：タタキ	密（～0.1cm大砂粒含む）	やや 不良	凹面：にふい橙（10YR6/4） 凸面：にふい黄橙（10YR6/3）		
48	015-01	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：ケズリ 凸面：タタキ	やや密（～0.3cm大砂粒含む）	やや 不良	灰（5Y5/1）		
49	014-01	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：摩擦著しく不明 凸面：タタキ	やや密（～0.2cm大砂粒含む）	不良	凹面：にふい黄橙（10YR7/4） 凸面：黄灰（2.5YR4/1）		
50	013-02	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：ケズリ 凸面：タタキ	やや密（～0.1cm大砂粒・ 金雲母含む）	やや 不良	にふい黄橙（10YR7/4）		
51	014-02	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：ケズリ 凸面：タタキ	やや密（～0.2cm大砂粒含む）	やや 不良	凹面：浅黄橙（10YR8/4） 凸面：灰白（5Y8/2）		
52	016-02	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：布目 凸面：タタキ	密（～0.1cm以下砂粒微量に 含む）	やや 不良	凹面：灰黄（2.5Y7/2） 凸面：灰黄（2.5Y6/2）		
53	016-01	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：布目 凸面：タタキ	密（～0.1cm大砂粒微量に含む）	不良	凹面：灰（5Y4/1） 凸面：灰黄（2.5Y7/2）		
54	012-01	瓦 平瓦	東地区 ①	SK403				凹面：布目 凸面：タタキ	密（～0.1cm大砂粒含む）	不良	凹面：灰白（5Y7/2） 凸面：灰白（5Y8/2）		
55	013-01	須恵器 椀	東地区 ①	SK403	-	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロヘラ ケズリ	やや密（～0.1cm大砂粒含む）	不良	外：褐灰（10YR4/1） 内：灰（7.5YR4/1）		
56	010-03	鉛玉	北地区 ②	C-A10 検出中	直径 1.4cm	-	重さ 11.870g				灰白（10Y8/2・N8/0）	完存	火縄銃の弾
57	010-04	瑪瑙片	北地区 ①	B-L11 検出中	-	-	重さ 3.907g						
58	019-01	鉄 刀子	西地区 ①	E-U4 検出中									
59	010-02	土師器 高杯	西地区 ③	E-S8 検出中	-	-	-	内：摩擦著しく不明 外：ハケメ	やや粗（0.2cm大砂粒含む・ 0.6cm大砂粒2個含む）	不良	外：にふい橙（7.5YR7/4・灰褐7.5YR5/2） 内：にふい黄橙（10YR6/4・ 褐灰10YR4/1）		
60	003-02	土師器 高杯	東地区	F-J15 検出中	-	-	-	内：摩擦著しく不明 外：摩擦著しく不明	粗（～0.3cm大砂粒多量に含む）	良好	にふい黄橙（10YR7/4）		
61	007-01	土師器 台付甕	北地区 ①	B-R14 検出中	6.0	-	-	内：摩擦著しく調整不明・ ナデ 外：摩擦著しく調整不明・ヨコナデ	密（～0.5cm大砂粒微量含む）	良好	外：橙（5YR7/6） 内：明黄褐（10YR7/6）	2/3	
62	010-01	須恵器 高杯	北地区 ③	A-O13 表探	9.3	-	-	内：ロクロナデ・シボリ痕跡 外：ロクロナデ	密（0.1cm大砂粒含む）	不良	灰白（5Y8/1）		
63	018-03	須恵器 蓋	A地区 （範囲 確認）	第2 トレンチ	10.0	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ・ロクロケズ リ	精緻（砂粒含む）	良好	青灰色（5BG6/1）		
64	018-01	須恵器 椀	A地区 （範囲 確認）	第2 トレンチ	12.2	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや粗（砂粒多く含む）	良好	内：灰白（5Y7/1） 外：灰色（N4/0）		

第8表 遺物観察表（2）

写真図版



写真 2 S H302全景 (南から)



写真 3 極東米軍機による遺跡周辺の垂直写真（1947年撮影）



写真 4 東地区調査前（北東から）



写真 5 東地区調査後（北東から）



写真 6 SK1全景（東から）



写真 7 SK1拡張後全景（南から）



写真 8 東地区①調査前（南西から）



写真 9 東地区①調査後（南から）



写真 10 S K403 (南から)



写真 11 S K403 (西から)



写真 12 西地区調査前（西から）



写真 13 西地区調査後（西から）



写真 14 西地区上部平坦面（北東から）



写真 15 西地区上部平坦面（南西から）



写真 16 S X201 (北東から)



写真 17 S X201遺物出土状況 (北東から)



写真 19 S K203 (南西から)



写真 18 S K202 (南西から)



写真 20 S K204 (南から)



写真 21 調査区全景（西上空から）



写真 22 北地区全景（垂直・上が北）



写真 23 S H101・102・103・104全景（垂直・上が北）

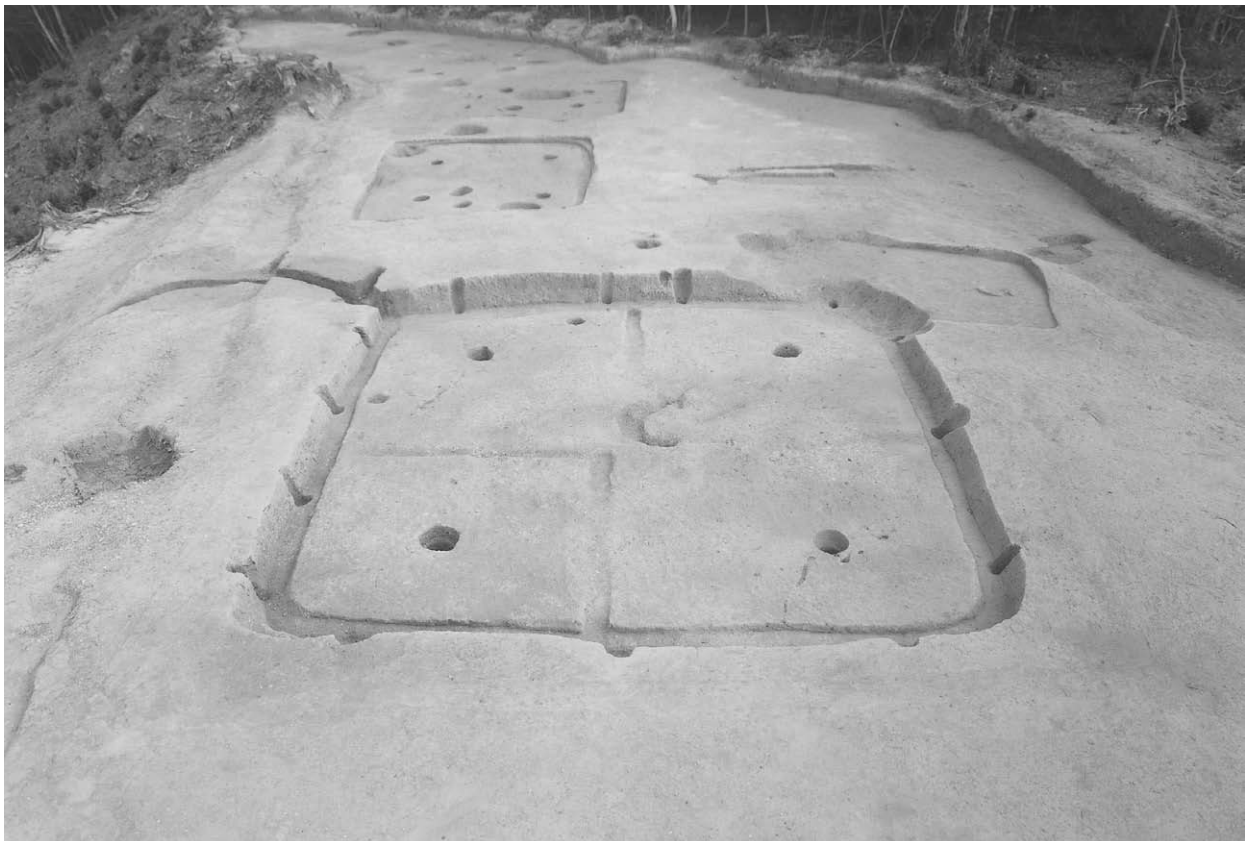


写真 24 S H101・102・103・104全景（西から）



写真 25 SH101検出状況（南西から）



写真 26 SH101全景（北から）

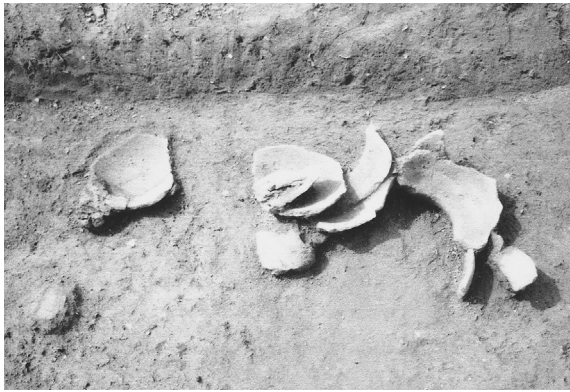


写真 27 SH102西周溝内遺物出土状況（東から）



写真 28 SH102貯蔵穴遺物出土状況（南西から）



写真 29 SH102全景（南西から）



写真 30 S H103遺物出土状況（東から）



写真 31 S H103床面検出状況（東から）



写真 32 S H103IV区遺物出土状況（東から）



写真 34 S H103排水溝土層北面（南から）



写真 33 S H103南東部分柱穴（北から）



写真 35 S H103排水溝（南から）



写真 36 S H103全景（南西から）

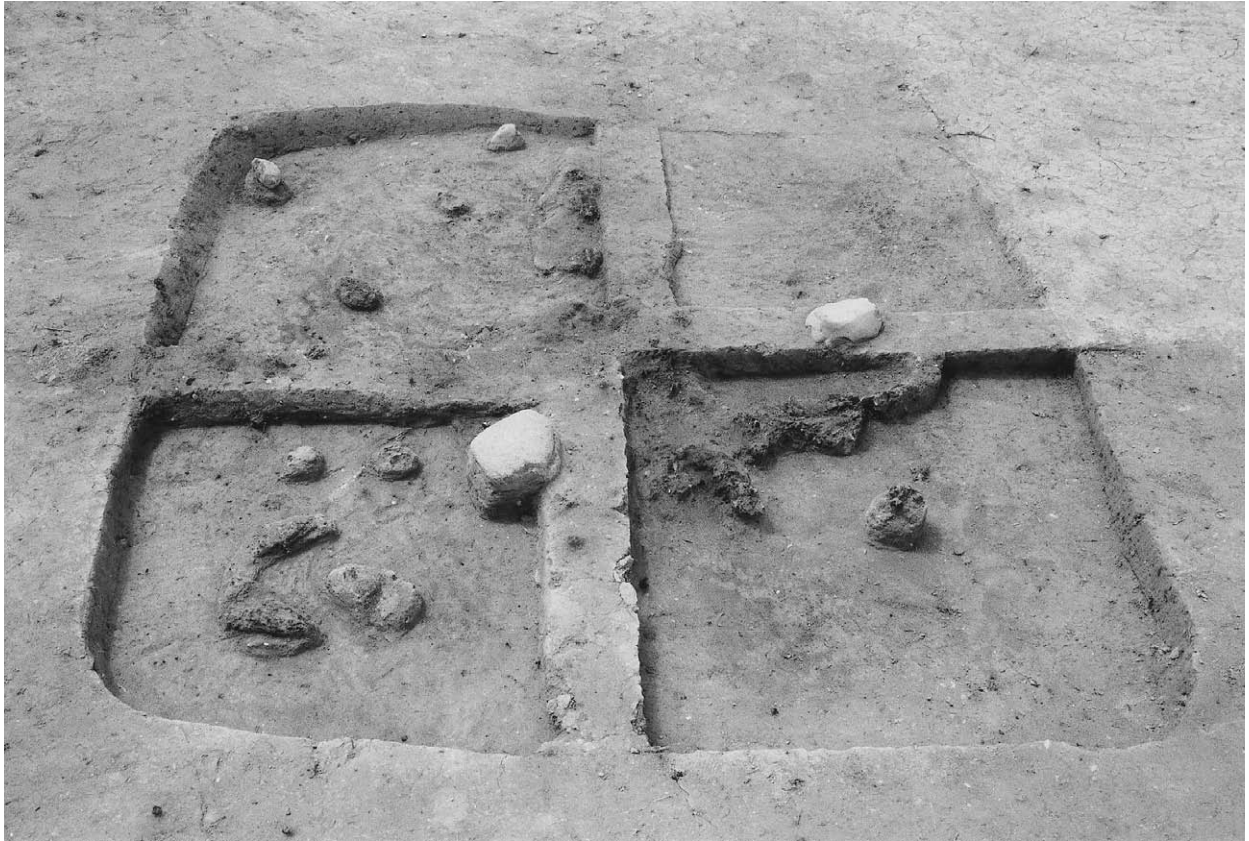


写真 37 S H104全景 (北東から)



写真 38 北地区①全景 (西から)



写真 39 北地区②調査前（南から）



写真 40 北地区②調査後（北西から）



写真 41 北地区③調査前（東から）



写真 42 北地区③調査後（東から）



写真 43 S K109 (北から)



写真 45 S K110完掘半裁 (南から)



写真 44 S K110 (東から)



写真 46 S K111完掘半裁 (南から)



写真 47 S K109・110・111全景 (東から)



写真 48 西地区①調査前（西から）



写真 49 西地区①調査前（北から）



写真 50 西地区①東斜面調査前（東から）



写真 51 西地区①東斜面調査後（東から）



写真 52 S H302床面検出状況（北西から）



写真 53 S H302全景（北西から）



写真 54 S H302遺物出土状況（東から）



写真 56 S H302Ⅲ区炭化材出土状況（北から）



写真 55 S H302炉周辺（西から）



写真 57 S H302排水溝検出状況（南から）



写真 58 S H302（南から）



写真 59 S K 301 (東から)



写真 60 S K 312刀子出土状況 (南から)



写真 61 S K 312刀子出土状況 (西から)



写真 62 S K312刀子出土状況（東から）

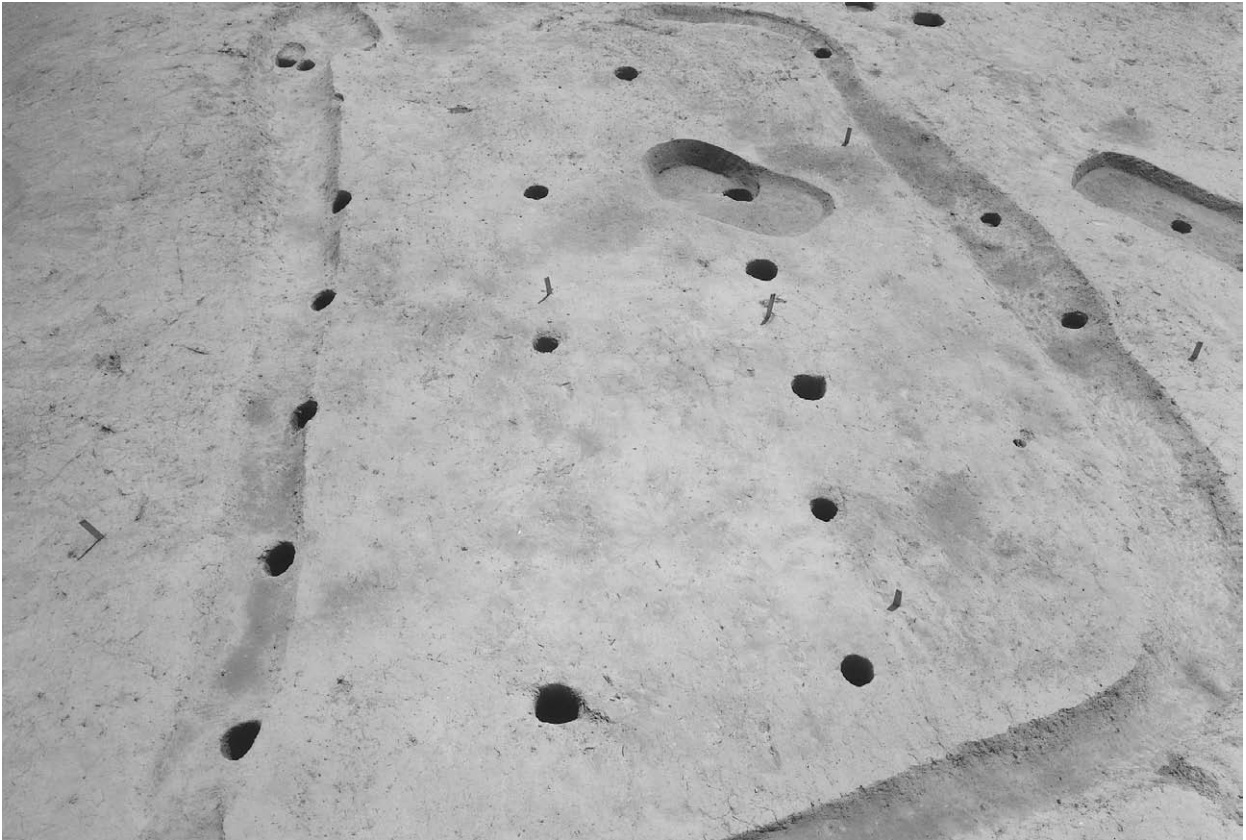


写真 63 S B307（北から）

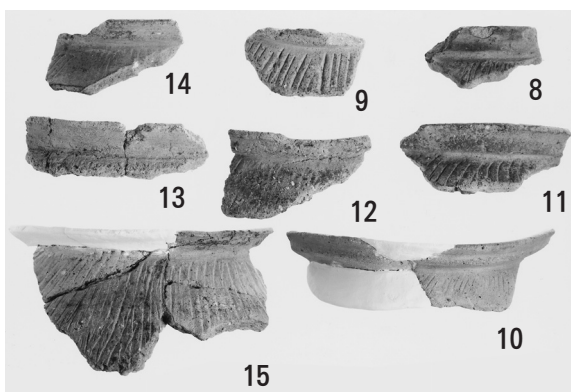
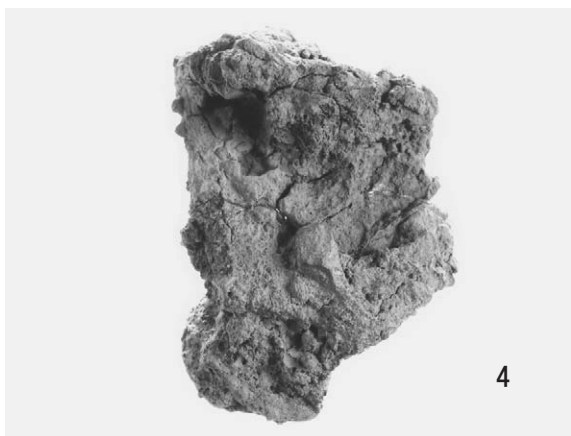
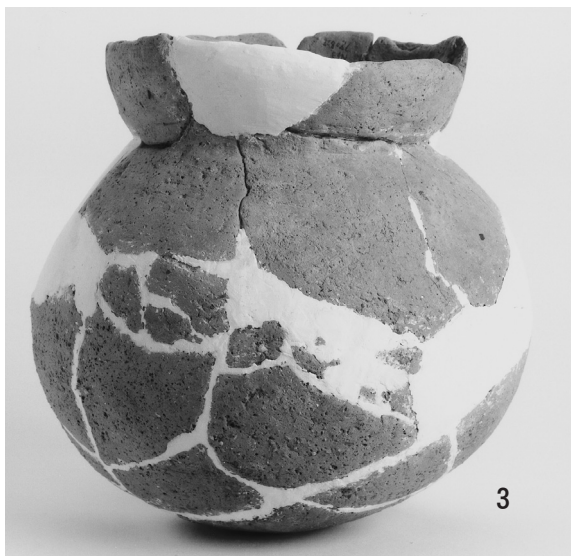


写真 64 出土遺物 (1)

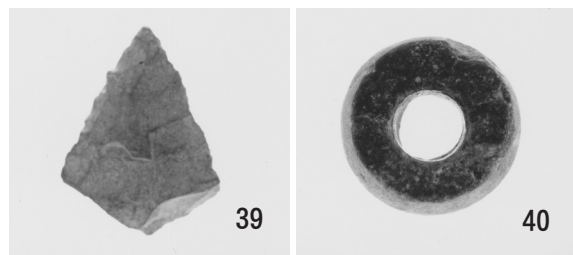
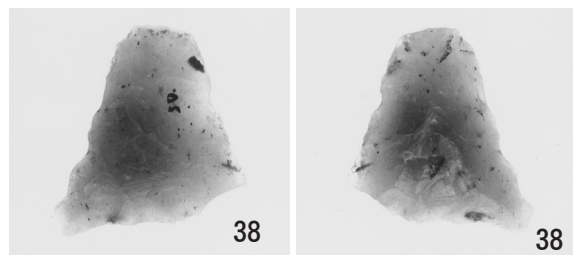
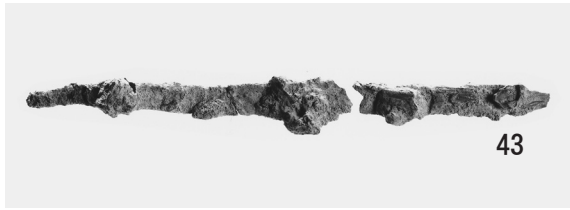


写真 65 出土遺物 (2)



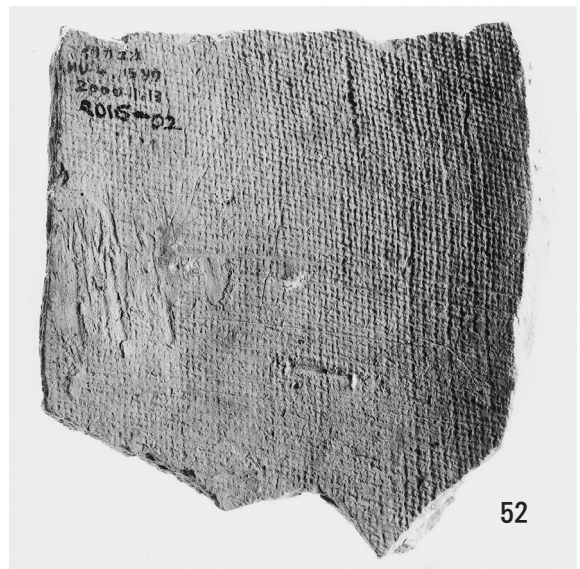
43



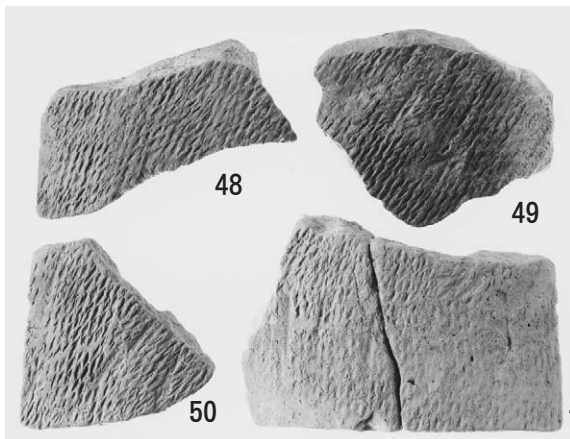
52



44



52



48

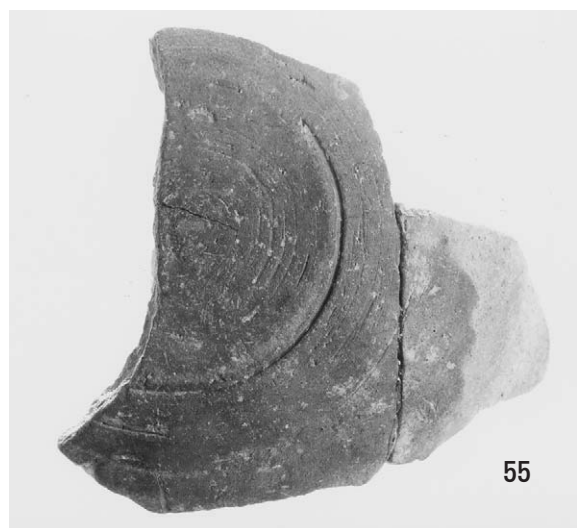
49

50

45



56



55

写真 66 出土遺物 (3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いさかいせきはつくちようさほうこく							
書 名	伊坂遺跡発掘調査報告							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	227-4							
編著者名	片岡博・服部芳人・原田恵理子・松田珠美・椿坂恭代							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503番地 Tel 0596-52-1732							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いさかいせき 伊坂遺跡	よつかいらし いさかちよう 四日市市伊坂町	24202	429	旧 35° 02' 06" 新 35° 02' 17"	旧 136° 37' 52" 新 136° 37' 42"	19990705 ～ 20020109	12,624 m ²	近畿自動車道 名古屋神戸線 (第二名神) 愛知県境～四 日市JCT建 設事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
いさかいせき 伊坂遺跡	銅鐸出土地・ 集落跡	縄文・弥生・ 古墳・白鳳 ～天平	陥し穴・竪穴住居・土 坑墓・古墳の周溝・掘 立柱建物・瓦窯の灰原	弥生土器・土師器・須恵 器・石鏃・砥石・白玉・ 刀子・平瓦	古墳時代の集 落・白鳳～天 平の瓦窯確認

い さ か
伊坂遺跡発掘調査報告

2004 (平成16) 年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 共栄堂印刷印刷株式会社